
片倉莊

Satch

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片倉荘

【Nコード】

N1481G

【作者名】

S a t c h

【あらすじ】

不当にアパートを追い出された翔が、片倉家の居候となり、同じ居候の女の子達とのドタバタ劇を描く、コメディ中心の物語です。

第1話：突然の話

「っていうことなので、明日出てってくれな」

「はっ!？」

「いや、だからね、明日この部屋を出てってくれって言ったんだ」

この、部屋を追いつくとしてるのは、
いい加減禿げあがった頭が眩しい60過ぎたじいさん…
俺が住む共同アパートの大家さんだ。

別に俺が何か悪さしたりして、追い出されるわけじゃないよ？

俺はまだ17歳の高校生で、家から高校まで通うのに遠すぎるという
ことで、

高校の近くにあったこのボロい共同アパートに入居した。

ボロいが住人達はみないいい人で、ここで1年ちょっと平和に過ごして
いたのに、

突然の退去勧告に、戸惑うばかりだ。

その理由は、このボロアパートを取り壊して、マンションを建てる
からだそうだ。

「なんですかそれ!？　　っていうか急すぎませんか？」

「うん、まあ、さっき思いついたから」

そう言って、自分の眩しい頭をさすっている。

「思いついたからって…」

「善は急げっていうだろ？」

いわねえよ！　この場合は！

「…」

「まあ、決まったことだから、それじゃ」

サッと軽く手を挙げて、頭をぽりぽり掻きながら去っていく大家の背中に、呪いでもかけたるか…

「はあ…」

ため息を吐きつつ、実家に連絡するために携帯を開いた。

…

「つてことで、アパート出てけってさ…」

「まあ、そうなの、大変ねえ…」

大変ねえって、あんたの息子がアパート追い出されるのに、そんな他人事みたいに言わないでくれ。

「俺はどうすりゃいいんだよ？」

「ちょっと待っててね、お母さん何とかしてみるから」

「何とかってなに？　って切れてやがる！」

なんか今になってもものすごい不安になって来たけど、この先大丈夫なのか、俺。

一翌日一

あの後、母さんから連絡が来て、ここに行かって住所言われて、今日その住所の場所に来たけど、どうみても一軒家だよな？

目の前にある一軒家は、豪邸とまでは行かないが、一般家庭よりはでかいが、門とかは普通の一軒家だった。

佇んでても埒が開かないので、呼び鈴を押してみる。

「はあい、どなたあ」

インターフォンから若干間延びしたような、大人びた女性の声がした。

「あ、あの、俺…大谷翔って言いますが…」

「あらあ？ 翔君なの？ 鍵開いてるから、入って」

「あ、はい…」

俺はドアを開けて玄関に入る、玄関は散らかっては居ないが、女ものと思われる靴が沢山並んでいた。

しばらく玄関に居ると、パタパタとスリッパの音がして、奥の部屋のほうから、30代前半くらいの女性が現れた。

「…っ！」

しかしその姿を見て絶句する、なんと裸にバスタオルを巻いただけ

の格好だったから。

「あら、ごめんなさいね、シャワー浴びてたので…」

「え、えーと…」

服を着る時間くらい待つのに…
目のやり場に困って、どもってしまう。

「ここじゃなんだし、上がって、キャア！」

突然悲鳴を上げた女性の声に、目のやり場に困って
俯いていた顔を上げると、裸の女性が目の前に居た。

いや、足元を見るとバスタオルが落ちていた。

胸を隠すようにその女性はバスタオルを拾い、俺に背を向けてバスタオルを巻いた。

俺の目はプルンと丸いお尻を見ていたことは言うまでもない。

俺が通された部屋は結構広く、食堂にあるような机が2つと、椅子が8脚ある部屋で、合宿所の食堂を思わせる。

勧められるまま、そのうちの1脚の椅子に腰掛ける。

「じゃあ、ちよつと着替えてくるから」

その女性は、そそくさと奥の部屋に消えていった。

俺は別にそのままでも良かったという叫びは、心の中に仕舞っていた。

「しかし、大きくなったわね」

「はっ？」

俺は思わず先ほど下半身が反応したことを言われたのかと思ったが、意外な事を言った。

「翔君とは小さい頃に会った事あるのよ」

そう言うと、俺の前にコーヒークップが置かれて、黒い液体が揺れて湯気が立っていた。

「えっ？　そうなんですか？」

「あ、そうそう、私の名前は、片倉京子っています」

「片倉：片倉：聞いたことがあるようなないような…」

「まだちっちゃかったし、覚えてなくてもしょうがないわね」

京子さんは艶めかしい口元に手を置いてクスクスと笑っている。

「あなたのお母さんからしばらくぶりに電話があってね、翔君をここに住まわしてくれないかって言われたのよ」

「あの、母とはどういう…？」

「まあ、所謂遠縁の親戚になるのかしらね」

「そうなんですか？ でも遠縁の親戚が居るなんて、全然聞いた記憶ないですね」

「遠縁ってそんなものじゃないかしら？」

「そうなんですかね？」

「そうよ、きっと」

なんかこのままだと答えが出ないまま、無限ループしそうなので、話題を戻す。

「それで、俺は…僕はここに一緒に住んでいいんですか？」

「もちろん！ 私に断る理由はないわ」

何故かその時、京子さんの瞳が妖しく光った。
それが妙にセクシーで、ドギマギしてしまう。

「って言っても、他に同居人もいるけどね」

「え？ あ…旦那さんですか？」

「ふふ、旦那とはとうの昔に分かれたわ、私は10歳になる娘と2人家族なの」

「2人でこのでかい家は寂しくないですか？」

京子さんは今度は小馬鹿にするような目で俺を見て言った。

「娘を同居人とは言わないでしょ？ 他に居候が3人居るのよ、居候と言っても、毎月部屋代はちゃんと貰ってるけどね」

「あ、そうなんですか」

「もうじき帰ってくると思うわ」

京子さんがそう言った時、玄関のドアが開く音が聞こえた。

「ただいまーってあれ？ お客さんかな？」

最初の声は、元気いっぱいの女の子の声だった。

「ええ？ わあ！ 本当だあ男ものの靴だあ」

次に聞こえたのが、若干間延びしたような女の子の声。

「お客とは珍しいな」

次に聞こえたのは、先の2名とは違い、冷静でクールな女の子の声。

「こんな靴履いているようじゃ、ろくな男じゃないでしょ」

最後に、トゲのある言葉使いをする女の子の声。
なんか、女の子の声しかなかったような気がするけど…

「あの…男の人はいないんですか？」

最後の女の子の言葉に軽くへこみながら、京子さんに尋ねる。

「あら：そっちの趣味が？」

「違うから！」

「それなら良かったわ」

何良かったのか聞きたいが、聞いたら負けな気がしてきた。

「男性は翔君だけね」

また京子さんの瞳に妖しい光が灯った気がしたよ。

この食堂のような部屋に、ガヤガヤと女の子達が入ってきた。
最初に声を出したのが、また10歳くらいの女の子。

「ママ、ただいまー、ってその人誰？」

俺を指差しながら、きょとんとした顔をしている。

「おかえり、今日からあの部屋に入る翔君よ」

「そうなんだ！ 娘の蘭です！ よろしくう」

「こちらこそよろしく！」

少し赤みがかったセミロングの髪で、天真爛漫を絵に描いたような可愛い女の子だ。

「鬼畜め！ 10歳の少女に欲情するとわ！」

「真顔で変な事いうな！ っていうか欲情なんかしてねーよ！」

思わず大声で突っ込んでしまった。

初対面で突っ込みを入れたのは初めてだよ…

「冗談だ」

「わかりずれえよ！」

「私は、あきらだ、よろしくな」

少しでも口角が上がったところを見ると、これが笑った顔なのだろうか？

整った丹精な顔立ちに、黒いストレートのショートカットで、少し…いやかなり冷たい感じがする女の子だ。これは俗にいうクールビューティというのだろうか？

「わわわ、わた、わたしは、なな、菜摘といいます、よろし…」

うーん、最後が聞き取れないくらい小さい声だったけど、よろしくということだろう…緊張しすぎだし。肩より少し長い黒いストレートの髪で、何となくおっとりとした幼い印象があるこちらも美少女だ。

「わたしは葉子よ！ 今日からあなたはわたしの下僕よ」

「ならんわぁ！」

この小生意気な美少女は、少し茶色い髪をツインテールにしている。なんでこんなにツンツンしているのか分からず首を捻る。

「よ、よろしく」

そう言うと、頬を真っ赤にしながらそっぽを向く。なんだコレは、もしかして、あの希少動物のツンデレなのか？

「おにいちゃん！　蘭がお部屋に案内してあげるね！」

俺の手を握り、ぐいぐいと引っぱって来る蘭。
その柔らかい手の感触に思わず頬が緩む。

「やっぱり鬼畜…」

「だー！　違うから！」

「さ、最低ですよお…」

「ちょ…」

「下僕に分際で」

「だから下僕じゃねええ！」

そんな俺たちのやり取りを京子さんは嬉しそうに眺めていた、
俺、ちゃんとここでやっていけるか不安になってきたよ。

第2話：居候たち

「おにいちゃん、こっちこっち」

ぐいぐいと俺の手を引っぱり2階に連れて行く蘭ちゃん。

階段ってやばいね？ え？ 何がっていうと、

蘭ちゃんのパンツがチラチラ見えてるからね。

とはいえ、10歳の女の子のパンツ見ても、なんとも思わないけどさ。

「蘭ちゃん、そんなに引っぱらなくてもいいからさ」

何故か京子さん、あきらさん、葉子さん、菜摘ちゃんの順で俺の後ろをぞろぞろと着いてくる。

「蘭ちゃんのパンツ見て喜んでるな」

「え？ やだあ！ おにいちゃん、エッチ！」

赤くなりながら慌ててスカートを抑える蘭ちゃん。

「あきらさん！ 別に喜んでないから！」

少し赤くなりながら、否定する俺。

「そうか？ でも見えてたことは否定しないのな」

「うっ…」

「私たちも気をつけなければな」

「そ、そうしてください…」

「私は別に見られても平気だけどな」

「俺が平気じゃないから！」

「それから私はあきらんで構わない」

え？ 俺の意見無視？

「わ、わたしも、な、菜摘って呼んでもらっていいですよ」

「わたしは下僕に呼び捨てにされるのはまっぴらごめんよ」

「私は女王様でいいわ」

「京子さん、どさくさにまぎれて何言ってるんですか！」

俺…突っ込み役、確定なのか？

これじゃ部屋に着く前に俺のHPが無くなるよ、早く部屋に連れて行ってくれ…

2階に上がった先は廊下になっていて、左右に2つずつドアがある。その右側の奥の部屋が俺の部屋らしい。

右側手前があきらさんで、左側手前が葉子さん、そして左側奥の俺の部屋の向かいが菜摘ちゃんだ。

「京子さんたちは？」

「私と蘭は1階に住んでるから」

「ああ、なるほど」

蘭ちゃんが部屋を開けて俺を中に招き入れて言う。

「ここだよ」

部屋の広さは6畳程で左側の壁際にベッドがあり、右側の奥の壁際には勉強机、その手前にダンスが置いてある。そして中央にはテーブルが置かれていた。

「連絡もらってすぐ掃除したから綺麗でしょ？」

「ありがとうございます」

今日1番の笑顔を京子さんに向けると、京子さんは何故かちよっと赤くなっている。

「部屋の鍵は壊れてるから」

「え…？」

「男の子だから平気よね？」

「はい…」

「他の女の子の部屋は、ちゃんと鍵があるから、襲おうと思ってもダメよ？」

「そんなことしませんから！」

「私は襲われても平気だけどね」

最後になにやら恐ろしい言葉が聞こえた気がしたが、ここは無視しておくのが、最良だと判断した。

そして特に興味を失ったのか、京子さんを筆頭に、女性陣はぞろぞろと俺の部屋を出て行った。
やっと1人きりになれたことに、安堵のため息を漏らしベッドになる。

：

しばらくして、ドアをノックする音がして目を覚ました。

どうやら眠っていたようだ。

もう1度ノックの音が聞こえたので、「どうぞ」と言うと、おずおずとドアを開けて、菜摘ちゃんが顔を出した。

「しよ、翔君ちょっと入っていい？」

「はい、いいですよ」

おどおどと落ち着かない雰囲気ですべての部屋に入ってくる菜摘ちゃん。その仕草が何となくおかしくて、つい笑ってしまう。

「わわ、わたし…わ、笑われることしましたあ？」

「いや、何となく可愛いなって思ってたさ」

「かかか、可愛いだなんてそんなあ…」

そう言うとき菜摘ちゃんは、ゆでダコのように赤くなった。
そしてテーブルに向かい合うようにして座る。

「しょ、翔君は何年生になるのお？」

「俺は2年生だよ」

「ええ！ 2年生…なの…？」

そんなに驚くなんて…俺って老けて見えるのかな…？

「そうだけど…そう見えない？」

意味を察したのか菜摘ちゃんは頭をブンブン振って否定する。

「あ…ごごめんなさい…そそそういう意味ではないのお」

何故かシュンっと小さくなって落ち込んでいる。

菜摘ちゃんが黙り込んでしまったので、取り成すように話題を振る。

「菜摘ちゃんは1年生？」

「わ、わたしは…3年生です…」

あれ？ 3年生って聞こえたけど、中学3年生かな？

「菜摘ちゃんは中学生なの？」

「ちちち違いますよお、高校生ですよお…」

3年生で高校生ってことは…

一瞬の沈黙、そして…

「ええええええ！！ 年上！？」

予測していたように耳を塞いでいる菜摘ちゃん…
いや、菜摘さん…しかも涙目だし。

「お、驚き過ぎですよお…」

涙目で抗議するその姿はどう見ても…年下。

「俺を騙そうとかそういう…」

「しょ、翔君ひどいですよお…」

本格的に泣きそうになってきたので、慌てて謝る。

「菜摘ちゃ…菜摘さん、ごめん…なさい」

そこへ俺の叫び声を聞いて、あきらさんと葉子さんが駆け込んだ。
た。

「ちょっとさっきの声何なのよ！」

開口一番、葉子さんが俺を咎めるように見る。
そして泣きそうな菜摘さんに気付くと

「あんた！ 菜摘さんに何したのよ！？」

「な、何もしてないですよ…その、年上って知らなくて」

「ああ…ならしうがないわね」

納得、早！

やっぱりしうがないことなんだと苦笑する。

「私たちも最初年下だと思ってたしな」

あきらさんが懐かしむように説明する。

「み、みんなひどいですよお」

泣きそうな顔で口を尖らす、いやもう泣いてるなこれは。

「で、菜摘さんはコッソリと翔君の部屋に何しに来たの」

「コッソリなんて誤解ですよお…わ、わたしこんな性格だから
早く打ち解けるようにと…」

「あんたも連れこんでんじゃないわよ！」

「ええ！」

なんで俺が怒られてるんですか？

っていうか菜摘さんの意見、無視ですか？

なんて口に出して言えませんか、ヘタレですみません。

って俺誰に言ってるんだろ？

そして何故か両腕を抱えられ、後ろ向きに連行されていく菜摘さんは、

すっかり落ち込んだ生氣のない顔だった。

っていうか結局、菜摘さんは何しに来たんだ？

少しの睡眠で回復したHPが急激に減った気分、荷物の整理をする。

：

荷物を片付けた俺は特にすることもないので、最近読み始めた推理小説を読んでいた。

すると菜摘さんのような遠慮がちなのと違う、しっかりとした意思のあるようなノックの音がした。

「はい」

「わたしよ、入っていいかしら？」

あのツンとした言い方は葉子さんだな…。

「どうぞ」

葉子さんは勢いよくドアを開けて、颯爽と部屋に入ってきた。その感じが葉子さんらしいなと思って、少し笑ってしまう。

「な、なにがおかしいのかしら？」

「なんか葉子さんらしいと思ってさ」

「それはどういう意味かしら？」

ジト目で俺を睨む葉子さんは怖いですが、でも何故か頬はトマトのようにすごい赤いです。

「べ、別に意味なんてないですよ？」

「そうかしら？ まあいいわ」

「明後日の月曜日は、2年生になって初の登校日よね？」

「そうですね…」

「朝、私のカバンを持って登校しなさい」

「なんでだよ！」

「下僕だからです！」

「だから下僕になった覚えはねーよ」

「素直に一緒に学校に行きたいって言ったらどうだ？」

開いたドアのところにあきらさんが立っていた。

「なっ！ そんな訳ないじゃない！」

「まあまあ、私たち同じ学校なんだから、一緒に行けばいいだろ？」

「え？ 同じ学校なんですか？」

「…」

「あんた何も知らないのね？」

葉子さんが蔑んだような目で呆れた声で言う。

「ごめんなさい…」

シュンッと項垂れる俺を一瞥して葉子さんが説明する。

「まあいいわ、あきらと菜摘さんと私とあんたは同じ川上高校よ、菜摘さんが3年生で、あきらと私とあんたは同じ2年生」

「そうなんだ、俺他のクラスと交流ないから知らなかったよ」

「私たちも結構顔が広いけど、あんたのこと知らなかったわ」

うん、なんか、すごい傷ついたよ。

でもそんな偶然ってあるもんなんだな。

「それは神様の都合よ」

あの…すみません…心を読まないで下さい。
それに神様の都合ってなんですか？

「そんなの私を知るわけじゃないじゃない！」

ごもつともです…

って、いや、あのね、心を読まないでったら。

「今度は私の番だから、葉子はさよならね」

あきらさんが葉子さんを部屋から押しやって俺の前に座った。
じーと俺の顔を見ているが何も言わないので、居心地が悪い。

「えっと…俺の顔に何かついてる？」

「…」

そんなに見つめられると恥ずかしいんですが…早くなにか言ってください！

「あの…」

「…」

これはアレですか？

獲物を捕らえようとする、蛇に睨まれた蛙ってやつですか？

「あきら…さん？」

「うん、合格！」

「…何が!？」

俺は自ら嵐の真っ只中に足を踏み入れたような、言い知れぬ寒気に身震いするしかなかった。

第3話：初めての就寝（前書き）

第1話と2話のサブタイトルを変更しました。

（第？話…X X X X↑コレ）

内容に変更はありません。

第3話：初めての就寝

午後も7時になり、お腹もグーグー鳴り出した頃、あきらさんがいきなりドアを開けて顔を出してきた。

「…っ！ あ…あきらさんノックぐらいしてくださいよ！」

「何故だ？ 急に開けられて困ることでもしていたのか？」

なにやら意味深な表情で口角を少しだけ上げている。

「そ、そんなことはしてないですけど…」

「じゃあ別に構わないだろ？」

まったく表情を変えずに何を言ってるんだろうか？ この人は…

「構わな…くは無いですよ！ 出来ればノックしてください！」

「できるだけ善処しよう」

なんか返事が軽いんだよな、本当に善処する気あるのかな？

「それより何か用ですか？」

「ああ、そうだった夕食の時間なので呼びに来た」

「あ、それはわざわざすみません」

「なんか他人行儀だな、その敬語はどうにかならんのか？」

「それは…そのうち無くなると思います」

「そうか？ それならいいが、それより行こうか？」

そう言うとおもむろに俺の手を取って立たせると、そのまま手を繋いで歩き出した。

「あの…手を離してもらえませんか？」

「いいじゃないか、別に減るもんじゃなし」

何コレ？ 普通立場逆じゃない？

確かに減りはしないけどさ、同世代の女の子と手を繋いだことがないから、

すごい恥ずかしいんですが…

「は、恥ずかしいです…」

「なんだ！ 手を繋いだこともないのか？」

そう言っているわりには、あきらさんも顔真っ赤じゃないか！でも口に出しては言えません…

「私も初めてだ」

「初めてなのかよ！」

この人は、本当に訳が分からない、1番しっかりしてそうなのに…

俺が連れられて来たのは、最初に皆と挨拶した、あの食堂のような部屋だった。

2つあるテーブルは横にくっつけて並べてあった。

1番端には、京子さんが座り、その隣に蘭ちゃんが座っていて、向かい側、京子さんの前に菜摘さんが座り、蘭ちゃんの前に葉子さんが座っていた。

「あ！ お兄ちゃんココ座って！」

蘭ちゃんが満面の笑顔で、自分の隣の椅子を軽く叩くと、あきらさんは俺の手を離して、葉子さんの隣に座った。

「ああ、蘭ちゃんありがとう」

蘭ちゃんは顔を真っ赤にして、えへへって感じで笑った。

「ちょっとあきら！ あんた今、私の下僕と手を繋いでなかった？」

「繋いでたけど、それがどうした？」

ええ！ と騒ぎ出す一同。

「もしかして、私の下僕のことを好きなの？」

「いや、よく分からない、しかし嫌いではないな」

「そう…」

何故か弱気になる葉子さんが気になったけど、やっぱり突っ込まずには居られない。

「葉子さん、俺葉子さんの下僕じゃないから！」

「ふん」

葉子さんはツンとそっぽを向いてしまった。

そのタイミングを見計らい、京子さんが場を改める。

「では、みなさん、いただきましょう、いただきます！」

「「いただきます！」」

料理は全て京子さんが作ってくれているらしい。
っていうか、手伝えよ女子達！

なんて言ったら命の灯が消えるので、言わないけどさ。
まあ俺も手伝って無いから人のこと言えないか。

…

夕食も楽しく終えて、今はみんなで談笑中。

菜摘さんが蘭ちゃんとは逆サイドの俺の隣に座っている。

っていつの間に！？ まったく気配を感じなかったけど？

「ちょっと菜摘さん、いつの間に、私の下僕の隣に移動したのよ！」

「だ、だって翔君が遠かったから…」

頬を赤らめて俯いた状態で、チラチラ俺を見ているのが可愛い。

「遠かったって程離れてないでしょ？」

「だってもっと近くで翔君の顔見たかったんだもん！」

だもんって…京子さんを抜かすと最年長なんだから…

「菜摘さんもの…」

なにやら葉子さんが呟いたようだったが、俺の耳には届かなかった。

そんなことを話している時、蘭ちゃんが爆弾を投下した。

「おにいちゃん、一緒にお風呂入ろう！」

「「なっ！」」

蘭ちゃんと京子さん以外、全員ハモったよ、美しい！
って違う、違う、美しい言ってる場合じゃなかった！

「だめだから！」

「えー！ いいじゃん、入ろうよー」

「蘭ちゃんやめなさい、翔君も今日は疲れているからね」

京子さんが助け舟を出してくれた。

「はあい」

素直に返事をする蘭ちゃんは可愛いね。

「じゃあ、明日ね！」

そうでもなかった！

「ということで、私と入りましょう」

娘に続いて、京子さんも爆弾投下しやがった。

「それは、もっとだめだから！」

「あらあ、いろいろしてあげたかったのにい」

一瞬頭にピンク色の映像が浮かびそうになったが、慌てて振り払った。

：

そんなこんなでやっと風呂に入れたが、俺に平穩は2度と訪れないのではないだろうか？

途中蘭ちゃんが裸で乱入してきたが、すぐに葉子さんたちに捕獲されて連行されていった。

風呂を出ると、何かと疲れたので、ベッドに入っとうとうとしていると、

静かにドアが開く音がして目を開ける。

「ん？ 誰？」

またあきらさんかと思ったけど、そこに居たのは、パジャマ姿で枕を持った、蘭ちゃんだった。

「おにいちちゃん一緒に寝よう…」

「え？ だ、ダメだよ」

「どうして？」

「どうしてって…」

「ダメ…？」

涙目でそう言われると、こっちも断れなくなるんだけど…
まあ、10歳だし、そんなに気にすることもないかな。

「い、いいよ」

するとぽあっと嬉しそうな笑顔になり、俺の枕の横に自分の枕を置いて布団に入ってきた。

え？ さっきの涙目はどこに？

「おにいちちゃんのお父さんってどんな人？」

「どんなって、普通の農家の親父だよ」

「優しい？」

「どうかな？ 俺には厳しいけどね」

「そんなんだ」

この娘も父親が居なくて寂しかったのかな。

京子さんの話だと随分前に別れたってことだから。

そんなことを考えていたら、蘭ちゃんはスウスウと寝息を立てて寝ていた。

「早！」

俺も蘭ちゃんの寝息を子守唄に眠りについた。

：

翌朝、葉子さんの怒鳴り声で目が覚めた。

「ちょっとあんたなにしてんのよ！」

「なにして寝てたんだよ」

ベッドで上半身だけ起こした俺が抗議の目を向ける。

「違うわよ！ 何で蘭ちゃんがここに居るのよ！」

まだベッドの中で眠っている蘭ちゃんを指差す。

ってこの葉子さんの声で起きないなんて…。

「一緒に寝てあげただけだよ」

「寝てあげたって…な、何も無かったんでしょね？」

「は？ 何があるっていうんだよ」

俺の頭はいまいち目覚めて居ないので、葉子さんが何を必死になっているのか分かってない。

「そ、それはあれよ…その…」

顔を赤く染めて、なにやらブツブツ言っている。

「それより何か用ですか？」

「用ってほどでもないわよ！」

なんで怒ってらっしゃるんですかね？

「ふん」と言って、勢いよくドアを閉めて行ってしまった。

ドアの閉まる音に、ビクッと身体を震わせて、蘭ちゃんが目を覚ました。

「て、敵襲？」

敵って誰よ？ ある意味当たってるけどな！

「驚かせちゃって、ごめんな」

「ううん」

蘭ちゃんは「うーん」と伸びをしてベッドを降り、自分の枕を手を持った。

「おにいちちゃん、また今度一緒に寝てもいい？」

「ああ、いいよ」

蘭ちゃんは満面の笑みで飛び跳ねるように部屋を出て行った。

この家は一軒家だが、3人まで使える洗面所がある。

俺は顔を洗うため、洗面用具を持って洗面所に向かう。

洗面所には、菜摘さんが歯を磨いていたが、パジャマで左肩が露出し、右足は膝までズボンが上がっていて、髪の毛はあちこちにハネ上がっていた。

なにこの絵に描いたようなお寝坊さんみたいな格好は…

「おはようございまーす」

「おぼぼう…」

おそらくおはようと言ったのだろうが、歯ブラシを咥えたままなので、よく聞き取れなかった。

しかも前方を向いたまま動いてないし。

自分も歯を磨きつつ、しばらく菜摘さんを観察しているが、時折思い出したように、手が動いているところを見ると、これ絶対寝ぼけてるよね？　っていうか寝てるよね？

顔を洗い終えた俺は菜摘さんで遊んでみる。

「菜摘さん」

耳元で優しく呼びかけてみるが反応なし。

「おい！ 菜摘！」

少し語調を強くして言うが反応が無いので、怒鳴ってみる。

「菜摘！」

「びや！」

悲鳴だか何だか分からない叫び声を上げて尻餅をついてから、まわりをキョロキョロしていた菜摘さんは俺を認識する。

「しょ、翔君ひどいですよお！」

立ち上がってプリプリと怒ってらっしゃいますが、口の周りに齒磨き粉が付いてますよ？

「あー…えーと…ごめんなさい」

笑いを噛み殺して、とにかく謝っておこう。

「それよりも、菜摘さん、前ボタン…」

菜摘さんはパジャマの上着のボタンが上から3つ外れていて、ピン

クのブラと谷間が見え隠れしていた。

「え？」

と言って、自分を見下ろしてから俺を見る、そしてまた自分を見下ろして、俺を見たところで固まる。

「キ、キャアアアアア！」

それから俺は、駆けつけた葉子さんとあきらさんに、事情を説明するが、なぜか怒られました。

第4話：学級委員

今日は高校2年生になって、初めての登校日。
俺たちが通う川上高校には、片倉家の最寄駅から駅を3つ分移動したところにある。

さらに学校の最寄駅から10分ほど電車で揺られると、この街1番の繁華街へと行くことが出来る。

片倉家は、最寄駅まで歩いて5分という好条件だった。

そして今、葉子さん、あきらさん、菜摘さんと一緒に、片倉家から最寄駅までの道を歩いている。

「ちょっと、あんた私のカバン持ちなさいよ」

「何ですか！」

「私の奴隷でしょ？」

「だから奴隷じゃねー！」

っていうか微妙に格下げされているよね？

何故に葉さんは、俺を下僕とか奴隷にしたがるのかな。

「ちょっと葉子さん？」

「何よ！」

なんで、強気の返事が返ってくるのでしょうか？

「なんで俺が奴隷なんですか？」

「…」

え？ 無視？

「葉子は翔のことが気に入ったんだよな」

あきらさんから爆弾発言を頂きました。

「なっ！ そんなんじゃないわよ！」

「照れなさんな、私にはお見通しだから」

「ち、ちがうわよ！」

葉子さんは早歩きでスタスタと先に行ってしまった。

「え？ あきらさん大丈夫なんですか？ あんなこと言って」

「ん？ 大丈夫だ。3歩歩けば忘れてるだろうから」

それニワトリだからね、人間は3歩じゃ忘れないよ？

：

学校に到着した俺たちは、貼り出されたクラス替えの表を見ていた。
この川上高校は、1年から2年になるときに、1度だけクラス替え

がある。

「お！ 翔！ 私と同じクラスだな」

「あ、本当ですね」

あきらさんがどこか嬉しそうに言うので、俺も嬉しくなった。

「私もよ！」

「あれ、葉子さんいたんですね？」

「いるわよ！」

「あー…葉子も一緒か」

心底嫌そうな顔で言うあきらさん。

「悪かったわね！」

口調は強気だけど、顔は笑っていた。

これは2人のコミュニケーションの一環なんだろう。

「わたし1人だけ違いますよお」

「そりゃ菜摘さんは学年が違いますからね！」

「だったら留年すれば同じになれるかなあ？」

恐ろしいこと言うなこの人は、でも故意にじゃなく、本当に留年す

るんじゃないだろうか？

「菜摘さんは学年でも成績上位なんだから、そんなことしたら、先生たちが嘆くぞ？」

「え？ あきらさん、菜摘さんてそんなに勉強できるんですか？」

「ああ、常に学年で5位以内にいるって聞いたけどな」

一瞬フリーズして頭が真っ白になった気がした。

「どうした？ 翔？」

「菜摘さんゴメンナサイ！」

土下座するような勢いで、菜摘さんに頭を下げる。

「ふえ？ 翔君なんで謝ってるの？」

「いや、菜摘さんて頭の残念な先輩かと思ってました！」

「ふえ！？ 翔君ひどいですよお！」

涙目の菜摘さんが、俺の胸をぽかぽかと叩くが、まったく痛くない。つていうか可愛らしい。

「ちょっと、あんたたち何イチャイチャしてんのよ！」

「え？ イチャイチャなんて、そんなこ、いだっ！」

「何で拳骨するんですか!？」

タンコブでも出来たんじゃないかってくらいの激痛に、頭をさすりながら抗議する。

「ふん!」

葉子さんはツンとしてそっぽを向いてしまった。

「ふんって…なんなんだ…」

「ヤキモチだな」

あきらさんが葉子さんに聞こえないように囁いた。

「え?」

なんで葉子さんがヤキモチ焼くんだろう?と俺は首を捻る。

「早く教室に行くわよ!」

そう言って、葉子さんは颯爽と歩いていった。

「じゃあ行きますか」

歩き出した俺とあきらさんの後ろに、菜摘さんも着いてきていた。

「菜摘さんは向こうでしょ!」

俺が菜摘さんの背中を少し押して、3年生の教室のほうに向けた。

「ふええ！」

「ふええじゃないですよ！　せ・ん・ぱ・い！」

「し、翔君、なんでわたしだけいじめるのお？」

ええ？　いじめてるつもりは無いんだけどな…

「それは菜摘さんが…」

「わ、わたしが…？」

菜摘さんのごきゅつと唾を飲む音が聞こえる。

「弄^{いじ}りやすいからです！」

ふえーんと泣き真似する菜摘さんを置いて教室に向かった。

：

葉子さんとあきらさんと一緒に教室に入る。

「よう！　翔！　おはよう！」

「おはよう、ゴミ太郎…」

「健太郎だよ！」

この妙に元気がいいのが、親友の杉崎健太郎。

成績も普通で、容姿も普通の平凡なやつだ。

「平凡で悪かったな！ それより！ 翔お前、相田さんや如月さんと一緒に住んでるんだって？」

「誰？ それ…」

「誰って…一緒に教室入ってきただろうが！」

「あ！ 葉子さんとあきらさんか？」

「そうだよ、苗字も知らなかったのかよ…」

「…」

「相田あきらさんと如月葉子さんだよ」

「し、知ってたよ…」

「嘘つけー！」

もう笑うしかないね、苗字を聞いてなかったもんな。

っていうかどんだけ情報通なんだよ！？

「一緒に住んでいうって言うのと誤解されるけど、同じ家に住んでいるだけだからな？」

「それだって充分羨ましいぜ！」

「3年の菜摘さんも一緒だけどな」

「菜摘さんって、木下菜摘先輩か？」

「苗字は知らないけどさ、学年で5位以内の成績だって」

「そうだよ木下菜摘先輩だよ！ お前！ この学校の3大美女を独り占めかよ、このやろ！」

健太郎は俺の頭にヘッドロックすると、拳でゴンゴン頭を叩いてくる。

「痛い痛い！ やめろバカがうつるから！」

「バカはうつらないからね！」

「独り占めって大げさなんだよ！」

やっとヘッドロックを外した健太郎の頭にチョップをお見舞いする。

そこへガラッと戸が開いて、先生が教室にやってきた。

「はい、適当な席に座ってください」

適当でいいのかよ！ 普通出席番号順とかじゃない？

窓際の1番後ろの席に俺が座り、俺の前にあきらさん、俺の右隣に葉子さん、葉子さんの前に健太郎が座った。

何この包囲網…

みんなあらかた揃ったところで、先生が自己紹介をした。

「えー1年の時、担当だった子もいると思いますが、園田一子と言います。」

29歳独身です！ スリーサイズは秘密よ」

秘密よってウインクしてるけどさ、スリーサイズとか…興味ないわ！

「はい、大谷翔君、減点1ね」

「なんでだよ！ ていうか何でもう名前知ってんだよ！」

「なんでって、生徒の名前を覚えるのは教師として当然のことよ？」

「うぐ…」

正論だけに言い返す言葉が見つかりません。

「では、みなさん、これから2年間よろしくね」

俺たちは始業式のために、体育館に移動した。

：

体育館での始業式も終わり、再び教室に戻って来た。

「大谷君、大谷君、また同じクラスだね」

尻尾を振って走り寄って来た1匹の犬。

もとい、スカートを翻し走ってきた女生徒。

「おう、岡田さんも一緒だったか」

「うん！」

嬉しそうに元気よく頷いているこの女子は、岡田翔子さん。

1年の時もクラスメイトで、身長がちっちゃくて、胸も無く、一見小学生のようだ。

そんな岡田さんの頭を撫で撫でする。

「ちょっと、子供じゃないんだから、やめてよー！」

真っ赤になりながら、それでも顔は笑っていた。

岡田さんが自分の席に戻っていくと、葉子さんのほうから視線を感じて、

そちらに向くと、ものすごい顔で睨んでいた。

こええ！ それじゃ美人も台無しだよ？

っていうかなんで睨まれてるの…？

そこへ担任の園田先生が教室に入ってきて、メデューサの目から逃れることが出来た。

「えー、まず、学級委員を決めましょう。男子は大谷君で良いと思う人」

「ちょ…」

「はい、決定！」

俺以外満場一致だよ…。

なんで立候補でも推薦でもなく担任の独断で決まるのよ？

俺は机に突っ伏すしかなかった。

「次に女子でやりたい人いますか？」

すると驚いたことに3人の女子が手を挙げた。

それはあきらさんと葉子さんと岡田さんだった。

「じゃあ多数決で決めましょう」

：

多数決の結果、断トツであきらさんが当選した。

「なんで、あきらなのよ！」

「人望の違いだろうな」

確かにあきらさんは、任せておけば安心できる感じだよな。

俺がうんうんと頷いていると、葉子さんにも鋭い視線で睨まれた。

岡田さんは机に突っ伏したまま動かないけど、寝てる？

「じゃ、後は学級委員に任せるから！」

サッと手を挙げて園田先生は颯爽と教室を出て行った。

「「…」」

俺とあきらさんは呆気にとられて、お互いに視線を合わせた。

「見つめ合ってるんじゃないわよ！」

いや、別に見つめ合ってる訳じゃ無いけどね？

第5話：葉子さんって何者!?

俺とあきらさんで、教壇の上にあった先生のメモを見ながら、いろいろな係りを決めている。

しかし先生のクセに字：下手くそだよな。

「ここ見てみる」

あきらさんが口角を上げて指差した部分を見ると、受け翔、攻め健太郎って…

何書いてんだよ！ 先生BL好きなのか？

「はいはい」

「岡田さんどうしたの？」

岡田さんがいつの間に復活したのか手を挙げてアピールしてる。

「飼育係がやりたいです！」

「そんなのないから！」

「えー！ そうなの？」

そうなのってそれワザとだろ!?

自分が小学生に見えるっていうのを利用しただけだろ？

しかもまわりは苦笑しかしてないからね！

あらかたメモに書いてあったことを終わらせた頃、図ったように園田先生が戻って来た。

「おつかれさーん」

教室に入ってきた先生の髪の毛がハネてるのを見て悟った。

「先生、寝てたんすか？」

「ええ！　ね、寝てないわよ！」

吹けもしない口笛吹いてるし、ってその誤魔化し…古！

「まあいいです、それよりメモにあった内容終わりました」

「本当？　助かったわ」

「それより今度こんなラクガキしてたらお仕置きですよ？」

俺と健太郎のことを書いたラクガキを指差す。

「お仕置き…」

「なんで赤くなってんすか！」

お仕置きで何を想像したんだろ？　禁断の香りがするので聞く気も起きない。

：

さて帰ろうかと教室を出ると、捨てられた子犬のような目をした菜摘さんが、

廊下で俺たちが出てくるのを待っていた。

「ふえーん！ 寂しかったよー」

そう言うとき菜摘さんはあきらさんに抱きついた。

最初俺に抱きつこうとして葉子さんに阻止されたので、あきらさんに向かったという経緯です。

なんか子供みたいだな菜摘さんは。

：

朝と同様4人で片倉家に帰ってくると、蘭ちゃんも帰ってきて、「おかえりー」っと俺に抱きついてきた。

葉子さんの阻止を小さい身体を生かし、かいくぐった成果だった。

「まあ蘭ちゃんならいいわ…」

葉子さんも少しお疲れのようですね？

とか言ったら、うるさいと言われるから黙ってるけどね。

っていうか俺、なんで葉子さんに管理されてるんだろう？

今日は学校は半ドンだったので、片倉家で昼食を取って、各自部屋に戻っていた。

さて今日はどうしよう？ 本屋に行きたいし、駅周辺でも探索してみるか、

着替えを済ませて、部屋を出たところで菜摘さんと鉢合わせした。

「あれ、菜摘さんでもかけるんですか？」

「あ、翔君、ちょっと本屋さんに行こうと思ってえ」

「マジですか？ 俺も行こうと思ってたので、案内してもらってもいいですか？」

「うん、いいよ！」

2人で玄関を出ると菜摘さんが鍵を掛ける。

片倉家では全員1個ずつ鍵をもっていて、出かける時は家に誰か居ても、必ず鍵を掛けることになっている。

「じゃあ、いきましようかあ」

そう言って菜摘さんが俺の手を取った。

「・・・っ！ な、何で手繋ぐんですか!?!」

「え？ はぐれたら行けないと思ってえ」

俺は高校生なんだから、はぐれたりするわけないのに…

「わたしが」

「菜摘さんがかよ！」

なんか無事に本屋にたどり着けるか不安になってきたぞ。

「菜摘さん、もちろん本屋には行ったことあるんですよね？」

「あー！ 翔君またわたしをバカにしてえ！」

ぷーと頬を膨らませて、拗ねた顔をする。ちよつと可愛い。

「そ、そういうわけじゃないんですけどね…」

「ちゃんと1人で行けたことが2回ありますよお！」

たわわに実った胸を反らして、誇らしげにしているけど、自慢できることじゃないからね？

いや、その胸は自慢できるけどさ…

「2回…？」

「大丈夫ですよお、いつもはあきらちゃんや蘭ちゃんに、連れて行ってもらってますからあ」

それは大丈夫とは言わくない？ あきらさんは分かるとしても、小学生の蘭ちゃんにまで連れてってもらってるって、高校生としてはどうなのよ？

相変わらず手を繋ぎながら歩いているけど、俺、顔真っ赤なんです
が…

菜摘さんは平然としているのが意外だった。

「翔君は何の本を買うのお？ …もしかしてえ…えっちい本とかあ
？」

頬を赤く染めて、キラキラした目で言われても違いますからね？
そういう本を買うなら、少なくとも女性と一緒に本屋には行かない
よ？

「そんなの買いませんよ！ 漫画とか小説を見に行くんです」

「なあんだ、ですよお」

心底残念そうな顔されても、期待には答えられないから！

「菜摘さんは何の本を買うんですか？」

「え！？ わ、わたしですか！？」

「あれ？ なんで動揺してるんですか？ もしかしてえっちな本で
すか？」

少し下から菜摘さんの顔を窺うように聞いてみる。

「ちっち違いますよお！ お料理の本ですよお」

空いているほうの手を顔の前でブンブン振って否定する。

「え！ 菜摘さん料理作れるんですか？」

すると菜摘さんは顔を曇らせて、首をフルフルと横に振った。

「作れないから買うんですよお」

「へえ、頑張り屋さんなんですネ」

「違うのお、お料理を作って食べてもらいたい人がいるからなのお」

「へえ、その人が羨ましいですね」

菜摘さんは何も言わずに少し潤んだ瞳で俺を凝視しているけど、なんか悪いこと言ったかな？

「あ！ 無事に本屋さんに着きましたよお」

無事になってところが気になったが、辿り着いてよかった。

そこは駅前通りの、専門書などもおいてある4階建ての少し大きな本屋だった。

っていうかこんな分かりやすい場所にあって、1人で2回しか来れてないって…

そんなんでよく学校とか行けてるよね？ あ、そうか朝はみんな一緒だしね。

「翔君は本屋さんの後の予定は、何かあるのお？」

「俺は、この駅前を少し散策してみようかと思ってます」

菜摘さんはすこし考えて、遠慮がちにお願いしてきた。

「わ、わたしもご一緒してもいいですかあ？」

「え？ 別に構いませんよ」

「あ、案内はできないですが…」

「そこは期待していませんから」

「…」

いや、そんな涙目で見られても、事実だからしょうがないでしょ…

30分後を集合時間と決めて、それぞれの買い物に散っていった。

小説や漫画を見てまわって、買うものも買ったけど、まだ15分ほど時間が余ってしまった。

菜摘さんでも探しに行くかと思い、料理本のコーナーに行ったけど居なかった。

おかしいなど行っただんどう？

本屋の出入り口に行くと、菜摘さんがボーっと立っていた。店員にじろじろ見られているけど、全然動じないというか、気付いてないのか。

「菜摘さん、どうしたんですか？」

「あ、翔君！ お料理の本買ったんだけど、時間が余ってしまった」

「なんだ、それなら声かけてくれればよかったのに」

「でもお、翔君の後くっついて歩いても邪魔かと思ってえ」

「え？ そんなに前からここで待ってたんですか？」

「友達に聞いて、買う本は決まってたからあ、すぐ買ってしまつてえ…」

健気というか、なんというか、それが菜摘さんなんだろうな。

「じゃあ、俺も終わったんで、出ましようか？」

「うん！」

それから菜摘さんと2人また手を繋いで、駅前通りを見てまわった。アクセサリーショップや雑貨屋などが軒を連ねていたから、飽きることなく時間が過ぎて行き、

今は少し洒落た感じの喫茶店で休憩をしていた。

「今日は楽しかったですね」

「そうですねえ、なんかデートみたいでしたねえ」

そう言って、菜摘さんは頬を染めて嬉しそうに笑っていた。

「え!?!」

言われてみればデートっぽい感じになってたような気がする。

「そ、そうですか？」

わざとらしくとぼけてみたけど、菜摘さんにジト目で睨まれた。

「これはデートですよねぇ？」

「いや、それはその…」

「デート！！　ですよねぇ？」

なんで菜摘さんはこんなにデートにこだわるんだろう？

「…はい」

すると菜摘さんはぱあっと明るい笑顔になった。

「わたしの初デートの相手は、翔君だあ！」

「え！？」

何故か俺は、その時背筋に冷たい冷気を感じていた。

：

今度は俺が先導して二人で片倉家に戻ってくると、全員揃って食堂に集まっていた。

「ちょっと2人ともそこに座りなさい」

葉子さんが何故か命令口調で、俺と菜摘さんを並んで座らせると、葉子さん、蘭ちゃん、あきらさんの順に、俺たちの前に座っていった。

京子さんは菜摘さんの横に座り、完全な包囲網が出来上がった。

「な、なんですか、葉子さん？」

薄々何を言われるか感ずいた俺は、声の上擦ってしまった。

「あんたたち2人で何処行ってきたのよ？」

「何処って、菜摘さんに本屋に連れて行ってもらったただけだけど？」

「ふーん、菜摘さんにねー、方向音痴の菜摘さんにねー」

なにコレ？　すごい寒いけど、部屋の温度下がった？

「そ、そうだけど…？」

吐く息も白くなっているかのような錯覚が起きてますよ。

「それはどうでもいいけど」

どうでもいいんかい！　もちろん声には出しません！

「本屋さんに行っただけにしては遅かったじゃない？」

「4階まであったし、いろいろ見て回っていたから」

葉子さんはジト目で俺と菜摘さんを睨むと、何やら手帳のようなものを取り出して

ペラペラとページを捲っていった。

ふと横目で菜摘さんを見ると、青ざめた顔でガタガタ寒そうに震えている。

葉子さんはページを捲っていた手を止めると、おもむろに切り出した。

「諜報部員の話によると、2人中睦まじく手を繋いで駅前通りを歩いていたら、

報告が来てるけど、これはどういうこと？」

諜報部員って何？ しかも今さっきの情報がもう届いているの？
恐ろしい…葉子さんを敵に回したら命さえ危ぶまれそうだ。

「そ、そ、それは菜摘さんが、はぐれたらいけないと言っただけで…」

「…っ！」

急に自分の名前が出た菜摘さんは、涙目で縋るように俺を見てきた。

「あらあら、翔君は手が早いよね？」

「なっ！　ち、違いますよ！」

京子さんが妖艶に笑ってるのが何故か怖い。

「それで、どっちが先に手を繋いだのよ？」

葉子さんは鋭い目で、さらなる追求をしてきた。

「な、菜摘さんです…」

「…っ！」

菜摘さんが本当に縋りついて来て、涙目で首をフルフルと横に振る。

菜摘さんゴメン、でも俺にはこの空気耐え切れないから…
いくらなんでも菜摘さんには酷いことはしないと思うし…
と目で合図を送るが、分かってくれたかは定かでない。

「菜摘さん？　ちょっとこちらへ来ていただけるかしら？」

葉子さんが妙に優しい声で、菜摘さんに声をかけるが、
菜摘さんはガタガタ震えているだけで動けなくなっている。

あきらさんたちは、嫌がる菜摘さんを両脇から掴んで立たせると、
どこかに連れ去っていった。

葉子さんも、後を追うようにジト目で俺に一瞥をくれて去っていった。

こわっ！　石にされるかと思ったよ…

その直後、菜摘さんの断末魔のような声が聞こえたのは言うまでもない。

第6話：デート（蘭編）

「ちょっと菜摘さん、デコピンくらいで大げさよ…」

葉子はため息をついて呆れた顔で菜摘を見る。

「だ、だってえ…」

目に涙を溜めて、ぐったりと座り込みながら葉子を見上げる。

「だってじゃなくて、みんなで決めましたよね？ 下僕…し、翔君
に関しては抜け駆けは無しだって」

葉子は初めて翔君と呼んだので、赤くなって少しどもって言い放った。

「抜け駆けとかそういうんじゃないのにい」

「まあ今回は菜摘さんの殺人級の方角音痴に免じて、これ位で許してさしあげます」

「ありがとうございます」

服の袖でゴシゴシと涙を拭い菜摘は立ちあがる。

「次はこれくらいじゃすまないからね!？」

「ひい！」

蘭が最後に言葉のナイフをグサリと刺して食堂に戻っていった。

「…」

菜摘を無言で一瞥して食堂に戻るあきら。

「み、みんな、冷たいよぉー」

「自業自得ね」

最後に葉子が食堂に戻っていくと、その背中を追いかけるように菜摘が付いていく。

「な、なんか物凄い声が聞こえたんだけど…」

食堂に戻って来た面々に声をかけるが、誰も答えてくれない。

葉子の後ろからフラフラと菜摘が歩いてくるのを見て、とりあえずは安堵のため息を漏らした。

「な、菜摘さん無事だったんですね!？」

「翔君ひどいですよお、わたしのせいにするなんてえ」

少し涙目の菜摘さんが俺の胸をポカポカ叩いていますが…

「え? 俺、嘘は言ってないけど…」

「うぐっ…」

菜摘さんは、そうだったというような顔をして、絶句してるし。

「それより、なんか菜摘さん、おでこ赤いですよ?」

「な、何でもありませんよ」と言っ、手の平でおでこをゴシゴシ擦る。

：

「ということで翔君、今週から日曜日ごとに、交代でみんなとデートすることになったから」

翌日の朝食の後、いきなり葉子さんから寝耳に水の展開。

「ということって、どういうことだよ!? ちゃんと分かるように説明してよ!」

なんか俺抜きで勝手に話が進んでるんだけど…っていうかいつ決めたの?

「だから、今週の日曜日は蘭ちゃんとデートで、翌週があきら、京子さん、私の順番にデートをするのよ」

「蘭ちゃんとデートって…蘭ちゃんまだ小学生じゃなか!」

「最近の小学生はすごいらしいよ」

何がだよ! 意味分かんねーよ! とは怖くて口に出して言いませんけどね。

「わたしだってお兄ちゃんとデートしたいもん！」

蘭ちゃんが口を尖らせて拗ねた顔で言った。

「…わかった、わかった」

ため息交じりに俺が答えると、蘭ちゃんはばあど顔を輝かせる。

「わーい！」

まあ…お守りだと思って、付き合ってやるか…。

「それよりさ、なんでそこに京子さんが混じっているの？」

1人だけ何か雰囲気違うから！

「あらあ、私だって翔君にいろいろ教えてあげたいわよ」

「何をですか…？」

妖しげな顔で見られても困るんですけどね？

「きゃー、私に何を言わせたいのー？ もう翔君セクハラよ」

ポツとほんのり赤く染まった頬を、両手で押さえたポーズしてますけど、

言ったらセクハラになるようなことを、させようというのか！？

「それから菜摘さんが入ってないですけど？」

何故か菜摘さんの名前が入ってなかった。

「翔君、菜摘さんが良いわけ？」

菜摘さんが目を輝かせて俺を見ているけど、なんなんだろう？

「え？ いや、純粋な疑問です」

途端に落胆した表情で、とぼとぼと食堂を出て行った。

「菜摘さんは1回チョンボしてるので、今回は抜きよ」

「チョンボ…？」

昨日、本屋行ったことを言っているのかな？ そんなんじゃないのに…。

「そういえば、俺のこと、翔君って呼んでくれてますね？」

「そ、それはあれよ…いつまでも下僕では気が引けただけ！ 文句ある？」

顔を真っ赤にして葉子さんが睨んでくる。

「いえ…ありません…」

なんであんなに赤くなって睨んでくるのか分からない、それに、なんだか俺だけスケジュールきつくない？

：

そして日曜日、俺は蘭ちゃんに手を引かれて、動物園に来ていた。

「あっちに熊さんがいるみたいだよ、早く行こう！」

蘭ちゃんがグイグイ手を引っぱってくる。

「そんなに引っぱらなくても行くからさ」

っていうか、俺たちってどう見えるんだろう？

やっぱ兄妹だよな、それっぽくしたほうがいいのかな？

なんて考えていると、目の前を同じような2人組が横切っていく。

「ゆーちゃん、早く！ 早く！」

「葵、そんなに引っぱるなよ、それから人前でゆーちゃんって呼ぶな」

彼らも兄妹じゃなさそうだな…。

まあやましいことしている訳じゃないし、気にしなくていいか。

「おにいちゃんどうしたの？」

「ん？ いや、なんでもないよ、あ！ ほら！ 熊が見えてきたぞ！」

所謂ツキノワグマってヤツかな？ かなりでかい。

「わー！ おっきいー！」

目をキラキラさせている蘭ちゃんを見ると、連れてきて良かったと思う。

「あ！ アライグマだ、ほんとに洗ってるー」

ニコニコしながら蘭ちゃんがアライグマを眺めている時、ペンギンコーナーのあたりで病人が出たみたいで、救急車が来たりして、しばらく園自体が慌しかったけど、今は静かになっていた。

それから2人で園内を一通り見て回って、動物園を後にした。

「おにいちゃん、これからどうするの？」

「どうするって、もう夕方だし帰るよ？」

朝から夕方まで遊んであげればOKだよな、明日は学校だしね。

「わたし、準備はしてきたから！」

無い胸を反らせて、なにやら自信満々に見上げてきた。

「準備って？」

「んとね、勝負パンツ履いて来たから！」

思わず飲んでいたジュースを吹きそうになった。
蘭ちゃんは頬を少し赤くして恥ずかしげに俯いていた。

「し、勝負パンツって…意味分かってんの？」

「良くは知らないけど、ママが履いていけて」

ハア…京子さん何考えてるんだよ！

普通、親なら心配するほうだろ？ いやまあ心配されるような事も起きないけどね。

「ママが、おにいちゃんにすべて任せればいいからって言ってた」

何をだよ！ とか突っ込んだら負けな気がしてきた…

一気に脱力した俺を、蘭ちゃんが不思議そうに覗き込んでいた。

「それはね…蘭ちゃんがもう少し大人になってからね」

「もう！ 子供扱いしないでよ！」

いやいやいや、実際子供だし！ でもそんなこと言ったら火に油だよね。

そして何とか拗ねた蘭ちゃんを宥めて、片倉家に帰ってきた。

「蘭ちゃん、優しくしてもらった？」

京子さんが最初に口を開いたが、何か意味深な感じで聞いているような…。

「うん！ おにいちゃん優しくかったよ！」

蘭ちゃんは満面の笑みで凄く嬉しそう答えた。

「あらあ、蘭ちゃんも遂に大人に」

「ないから！ 有り得ないから！」

やっぱりそういう意味で聞いていやがった！

俺の危険発言探知機が作動し、電光石火の突っ込みで難を逃れた。

蘭ちゃんは意味が分かっていなくて、不思議そうな顔で俺と京子さんを見ていた。

「ほ、ほら見なさい、翔君にそんな度胸はないでしょ？」

何故か少し安心しているような葉子さんが、あきらさんに何か言ってるけど…

「翔も意気地なしだな…」

「何がだよ！ っていうか何の会話だよ！」

葉子さんのとなりに移動し、あきらさんに詰め寄るように立った。

「え？ 翔が蘭ちゃんに手を出すほうに、ジュース1本賭けてた…」

なに賭けてんだよ！

「さすがに10歳の幼女に手出さないから！ それで意気地なしって酷いよ！」

「私は信じていたわよ？」

いやいや葉子さん：あなたさっき少し安心してたよね？
ってことは信じきっていなかったことになるから！

「それより菜摘さんはどうしたんですか？」

「ああ、菜摘さんは、部屋暗くして体育座りしてたわ」

「それ大丈夫なんですか？　　っていうか何故！？」

「自分だけ、のけ者だとか呟いてたわ」

「そ、そうなんですか…」

「ええ…」

今度、遊んであげるか…、デートとかじゃないけど…。

「来週は私とだな、どこに連れて行こうか」

あきらさんが口角を上げて、ニヤッと笑った。

その瞬間、背筋がゾクつとしたんですけど、風邪かな？

それに、普通は連れて行って貰うんじゃないの？

まあ、4人と一週間おきにデートだから、行き先決めてくれるなら、
いろいろ考えなくて楽だけどね。

っていうかこれって、新手の拷問じゃないのか？

「お腹空いた！」

蘭ちゃんの元気が声が食堂に響き渡り、夕食となった。

「蘭ちゃん？ 今日はどこに連れて行ってもらったの？」

京子さんが、もりもりご飯を食べている蘭ちゃんに優しく聞いた。

「うんとね、動物園に連れてってもらったの！」

「そう、良かったわね、楽しかった？」

「うん！ たくさん動物さん見れて楽しかった！」

そんな二人の会話を、みんな微笑んで見ていた。

「そう、変な事されなかった？」

「？ 変なことって？」

「ちょっと待って！」

俺の危険発言探知機が急速に作動し始め、会話を遮ろうとしたが遅かった！

「チュウとか」

「チ、チュウなんかされないよ？ 普通されるの？」

京子さんは「うん」と頷いてるけど…

「ええ！　されてない！　おにちゃんどういこと！？」

「蘭ちゃん、あのね、普通は最初のデートでチュウなんかしないから！」

すると蘭ちゃんは「そうなの？」と、葉子さんやあきらさんに聞いている。

「京子さん変な事言わないでください！」

「変な事？　私はいつも最初のデートでするけど？」

「え…？　いつも？」

「もちろん、相手を気に入ればだけどね」

そこでウィンクしながら自分の人差し指にキスをするポーズをされても、困るんですけどね。

俺、もしかして地雷踏んだかも知れない。いや…もしかしなくてもか。

「だから翔君も、私がリードしてあげるからね？」

「ダメだから！　っていうか困るから！」

そんな心底残念そうな顔されても、俺もやっぱり好きな人になりたいから！

第7話：デート（あきら編）

あきらさんに連れられて、遊園地にやって来ました。

っていうか、デートとしてはめっちゃ普通じゃん！定番中の定番だよ！

「なんだ？ 遊園地じゃ不満か？」

俺の脱力した様子を見て、あきらさんが心配そうに顔を覗き込んできました。

「いや、すごい普通だなと思って」

バンジージャンプとかさせられるんじゃないかと、内心ビクビクしてたけど杞憂に終わった。

「俺にダイブでもさせられると思ったか？」

「：っ！」

俺の予想を上回ることを言ってるよ！ ってそれ死ぬから！

「冗談だ」

口角をちよつとだけ上げて笑ってるけど、冗談を言っている顔じゃないよね？

どう見ても挑発的な笑いにしか見えないから！

「じゃあアレに乗ろうか」とあきらさんが指差したのは、この遊園

地の売りとなっている絶叫ジェットコースター。

「え！？ いきなり？」

「うん、まずはアレに乗らないとな」

そう言って、俺の手を掴みおもむろに歩き出した。

女の子に手を繋がれるのにも、だいぶ慣れてきたけど、顔はまだ少し赤くなる。

まだ時間が早いからすぐ乗れそうだけど、30分くらいは待ちそうだった。

しかしこのジェットコースターの「DEAD OR DEATH」って名称はどうだろう？ ORで区切ってるけどどっちも死だからね！

そんなツツコミを入れてみると、ようやく俺たちの乗る番が来た。繋いでた手が離されたことに気付いた時には、あきらは1番前に乗り込んでる！ 早っ！

「翔！ 遅いぞ！」

「あきらさんが早すぎなんですって！」

目をキラキラさせて今か今かと発進を待っているあなたは小学生の男子ですか？

「お！ 動きだしたぞ！」

この最初にカリカリ音を立てながらゆっくり登っていくのが嫌なん

だよね。

「早く！ 早く登れ！」

どんだけ絶叫したいんですか！

そして最高到達点から最高速で下って行った。ひねったり回転したりと結構ハードだ！

あきらは両腕を上げたりして楽しんでたけど、俺にはそんな余裕な無かった。

1回乗り終わったあきらは、今乗ったジェットコースターの列の後ろに並んだ。

「え！？ また乗るんですか？」

「ん？ 嫌か？」

「嫌じゃないけど…何か違うのに乗ってからがいいな、なんて」

「却下！」

早！ っていうか、やっぱり俺の意見は通らないのね…。

途中から意識が無いから、正確には分からないが連続で10回くらい乗ったかな？

さすがにそれだけ乗ると気持ち悪くなり、今はベンチに横になって休んでいた。

頭はあきらの太ももの上にあり、とても柔らかくて良い感じで

す。って何考えてんだ俺！

「だらしないな！ 翔は！」

柔らかい太ももの上から恨みがましく見上げると、あきらさんと目が合い、
なんかこの状況が妙に恥ずかしくなって顔が真っ赤になるのが自分で分かった。

「翔？ 赤くなってどうした？」

どうした？ って聞いているあきらさんも顔が真っ赤じゃん！

「な、なんでもないです…」

「そ、そうか…」

気まずい！ 何か喋らなきゃと思うが、こういう時に限って話題が出てこない！

「あ、俺、もう大丈夫ですから」

そう言って起き上がると、あきらさんも少しほっとしたような様子だった。

「これからどうしようか？」ということで辺りを見回してみると、休んでいたベンチの前方に、お化け屋敷があるのが目に入った。

「あ！ お化け屋敷がありますね？ あれ行きましょう！」

俺はお化けとかそういうのは大丈夫だし、あきらさんもきつと大丈夫だろうと視線を向けると、

顔を青くして「お、お化け屋敷」とか呟いているのが聞こえてきた。

そこでピンと来た俺は、あきらさんの手を取って、お化け屋敷のほうに引っぱる。

「し、翔？ の、喉乾かないか？」

「いえ、別に？」

ぐいぐいとお化け屋敷のほうに引っぱっていくと、あきらさんは段々涙目になってきた。

「あきらさん、どうしたんですか？もしかしてお化け屋敷が怖いとか？」

「そ、そんな事ある訳ないだろう！」

今度は逆に俺をぐいぐいと引っぱってきた。その無理している背中が可愛らしい。

やめても良かったがそのままお化け屋敷に入っていくので、逆らわないことにした。

：

「ぎゃあああああ」

入ってすぐあきらさんは俺の腕にしがみついて、泣き叫んでいた。

既に虚勢を張るプライドも消えて無くなる程、怖がっているみたい。こんなあきらさんを見るチャンスなんて滅多に無いからレアだよな。しかしそんなにしがみつくと、胸が肘に当たって柔らかい感触があります！

洋服を着ていると分からないけど、意外とあります！ そんなこと口にしたら死にますが！

お化け屋敷を出ても、あきらさんはまだ腕にしがみついたままだった。

「あ、あきらさん？」

いつまでも何も喋らないあきらさんに呼びかけてみる。

「翔…覚えてろ！」

あきらさんは俺を半眼で睨んでくるけど、目に涙が残っているので迫力に欠ける。

「うん、覚えとくよ！ あきらさんの泣き叫ぶ姿をね！」

「…くっ！」

あきらさんはしがみついていた手を離すと、ズンズンと先を歩いて行ってしまった。

やべえ！ 本気で怒らせちゃったかも知れない。

「あきらさんちょっと待ってよ」

足早に歩くあきらさんに追いついて呼び止める。

「あきらさんってば！」

急にくるつと振り返ったあきらさんの顔は別に怒ってはいなかった。怒ってはいなかったけど、いつもと違って見える、そう女の子っぽい顔をしていた。

「翔だけだから！」

「え？」

「あんな姿を見せるのは翔だけだから！」

口止めかな？

「分かってますよ、誰にも言いませんから」

「分かってない！」

あきらさんはまたズンズンと足早に先を歩いて行ってしまった。

「…？」

口止めじゃないの？ 意味の分からない俺は首を傾げるばかりだった。

：

絶叫コースター「DEAD OR DEATH」にもう1度乗って、

何とか機嫌を直してもらい、
今はジュースを飲みながら休憩していた。

「翔、さっきはすまん！ 全部忘れてくれ！」

「大丈夫ですよ、もう忘れましたから」

あきらさんは何故か少し寂しそうな顔をしてから笑った。
それはいつもの口角を上げるだけの笑いではなく、ごく自然な笑顔
だった。

「あきらさん、その笑顔かわいいですよ！」

「な！ 何を言っている！」

みるみるうちに真っ赤になっていくあきらさん。

「翔…おまえは…天性の女たらしなのか…？」

何やら小さい声で呟いていて良く聞き取れない。

「え？ なんですか？」

「いや…何でもない…そろそろ帰ろうか？」

「そうですね、だいぶ暗くなって来ましたしね」

どちらからともなく手を繋いで、出口ゲートを潜った。

…

片倉家に戻ってくると、京子さんと葉子さんが食堂でお茶を飲んでいた。

「ただいまー」

「あきらちゃん、チュウした？」

京子さんが開口一番にあきらさんに聞いてるし…まずおかえりとか言つてよ！

っていうか何で京子さんはそんなにキスをさせたがるのだろうか？

「だから京子さんと違いますから！」

「なあんだ、つまんない」

つまんないって…

「それよりあきら！ 何も無かったでしょうね？」

「ああ、葉子が考えているようなことは無かったよ」

「それならいいわ」

いつも思うけど、葉子さんは俺のマネージャーなのかな？

「蘭ちゃんと菜摘さんはどうしたんですか？」

俺たちが帰ってくるのを待っていると思った2人がいないので聞いてみた。

「菜摘さんが蘭ちゃんに連れられて買い物に行ったわ」

普通逆だから！　蘭ちゃんが菜摘さんに連れられてが正解だから！
まあ菜摘さんの殺人的な方向音痴ではそう言われても仕方ないか。

「ただいまー」

何とも言えない絶妙なタイミングで、蘭ちゃんと菜摘さんが帰ってきた。

「翔君、今何か失礼な事考えてなかった？」

んー？　と菜摘さんが顔を近づけてくる。顔近い！
あと数ミリで唇がくっ付きそうだよ！　っていうか明らかにワザと唇近づけてるよね！？

「か、考えてないっすよ！　それより顔近い！」

バシィィィン！

葉子さんがどこから出したのか不明なハリセンで菜摘さんの頭を叩いた。

叩いた衝撃で俺の唇と菜摘さんの唇がほんの少しだけ触れた。気がした。

「いっ！　たーい！」

「菜摘さん顔近すぎだから！」

「だからってハリセンで叩かなくてもお！」

涙目で菜摘さんは抗議の目を向けるが、葉子さんはまったく動じてない。

「ねえ…今…唇触れなかった？」

葉子さんは菜摘さんの後ろにいたので見えていなかったが、蘭ちゃんは何の横に来ていたから見えてたらしい。

「え!?! ちょっとどうなの？」

葉子さんは何故か俺ではなく菜摘さんに掴みかかるように問い詰めた。

「へ?。」

菜摘さんは目をパチクリさせて葉子さんを見つめた。
たぶん菜摘さんは叩かれた衝撃で覚えてないのかも、ってことは…

「翔君どうなのよ！」

案の定、矛先が俺に向いた！

「え、えっと…ギリ触れてないですよ！」

手を顔の前でブンブン振るが、半眼で睨んでくる葉子さんの顔怖いっす！

「ほんとーに？」

蘭ちゃん、その子供特有の純粋な澄んだ目で問いかけるのは止めてくれ！

「ほ、本当だよ！」

ごめんね蘭ちゃん、でもここは嘘をつき通さないと俺の…いや菜摘さんの命がなくなるからね。

幸い菜摘さんは覚えていないみたいだし、それに本人の俺でさえ触れたのかどうか分かってないから。

「まあいいわ、翔君を信じましょう。でもこれがもし嘘だったら翔君…分かってるわよね？」

「は、はい…」

：

夕飯までまだ少し時間あるからと皆それぞれ自室に入っていく。

「し、翔君？」

俺が部屋に入ろうとした時、菜摘さんが遠慮がちに声をかけてきた。

「はい？」

「あ、あの…」

何故かもしもじとしていて、なかなか続きを話ささない。

「菜摘さん？」

少しじれっなくなつて先を促すように名前を呼んでみた。

「わ、私…ファ…ファ…」

くしゃみがしたいとか…じゃないよね？　なんだろ？　ゴルフのキヤディ…の訳ないよな。

「…！？」

「わ、私のファーストキス！」

菜摘さんは、それだけ言う顔と顔を真っ赤にしながら自室に入っていた。

もしかして…というかやっぱ唇が触れて…いた？　まじか！

しかし菜摘さんは葉子さんに問い詰められて誤魔化し切れるタイプじゃないよな。

ってことはあの時何を言われたのか分かっていなかったただけか…。

：

夕食が出来たと呼びかけがあったので自室を出ると、ちょうど菜摘さんと鉢合わせした。

「…！？」

目が合った途端真っ赤になって俯く菜摘さん。

やばい！　このまま食堂行ったら異変に気付かれるかも知れない！

「菜摘さん、お、俺もファーストキスですよ！」

「…！？」

あー…俺も恥ずかしいですって意味で言ったんだけど…

菜摘さんはフラフラと、いやフワフワと？　食堂に向かって歩き出した。

数分後、菜摘さんが口走ったお陰で、唇が触れていたことがバレて皆に睨まれた…。

第8話：思わぬ伏兵

昨日の夕食の後、菜摘さんは何処かに運ばれ、断末魔のような声が片倉家に響き渡った。

「菜摘さん大丈夫なんですかね？」

フラフラと生気の無い顔で、俺たちの後ろを歩く菜摘さんを見た。

「大丈夫なんじゃない？」と葉子さんは素っ気ない。

「学校まで辿り着けないんじゃないですか？」

「その時は生物ってことでクール宅急便で送ればいいだろう？」

あきらさんも振り返りもせず冷たく言い放つ。

「いや、なまものと言えはなまものですけど…」

「違う！　いきものだ！」

そりゃ字は一緒ですけどね…ってこれコント？

そんな下らないことを話しているうちに学校に到着。

菜摘さんも何とか辿り着いて、フラフラと自分の教室に向かって歩いていった。

あの様子では、きっと今日は勉強に身が入らないだろうな…。

「翔！ おは！」

右腕を大きく振って健太郎が挨拶してきた。

「おはよう、蟲太郎」

「健太郎だよ！ それにその「蟲」^{むし}って字はやめろー、せめて「虫」にしてくれ！ ってそれも嫌だけどな！」

「ちよっ…うるさい！」

葉子さんに睨まれて縮こまる健太郎を置いて席に向かった。

「おはよー！」

「やあ、おはよう岡田さん」

元気な声と共に、颯爽と走って来る岡田さん。そんなに走るとスカート捲れるよ？

「大丈夫スパッツ履いてるし、それより葉子ちゃんたちと日曜にデートしてるって本当？」

スカート捲れそうって思ったの、なんで分かったんだろ？ 目線かな？

それになんで岡田さんがデートの事知ってるんだらう？

「してるけど、なんで知ってるの？」

「それはちょっと言えないなー」

両手で口を押さえているけど、大方、葉子さんにでも聞いたんだろう。

「わ、わたしもまぜてもらいたいなー、なんて…だめ？」

「え？ 俺は別に良いけど…」チラッと葉子さんを見る

「OKよ」

「ええ！？」

当然断ると思っていたのに、なんでこんなにあっさり了承が出るのでしょうか？

「諜報部員のお願いだからね」と岡田さんに向かってウィンクした。

「ええ！？ 諜報部員って岡田さんだったの！？」

「え？ 知らなかったの？」

その「何を今更」って顔するのやめてください。初耳なんですから…

「やったー！ 大谷君とデートできる！」

あの…そんな大声で言わないで！ 教室中ザワザワしだしたから！ザワザワした中にロリコンとか鬼畜とか単語が聞こえてきてるけど、小学生に見えて同級生だからね！

「あ、大谷君、私もいいかしら？」

「丁重にお断りします！」

「何で先生には冷たいのよ！」

「先生だからですよ！」

どこの世界に生徒とデートする先生が…今の時代いなくても言い切れないか。

「くそ！ 内申書覚えてろ！」

それ職権乱用だから！ っていうか、くそ！ って先生が言うセリフじゃないよね？

その後の出席確認では、見事に俺の名前飛ばされました。ってこれ先生のイジメじゃないの？

「えー、大谷君は放課後職員室に来るように」

園田先生は俺をひと睨みすると、朝のホームルームを締め括った。

「翔、どうするんだ、先生怒ってるみたいだったぞ」

あきらさん口角上げて笑うのやめて！ 楽しんでいるようにしか見えなから！

「まあ、たまにはこってり絞られるのもいいんじゃない？」

何たまにはって、それだいつも俺が、いい待遇を受けて…いるの

かな？

「翔！ このやろ！」

健太郎が俺の頭にヘッドロックし、拳でゴンゴン頭を叩いてくる。

「いてーな！ なんだよ！」

「何でお前だけモテるんだ！ チクショー！」

「しらねーよ！ 離せ！ 変態がうつる！」

「変態はうつらないからね！ って変態じゃねー！」

健太郎はヘッドロックを外すと、どこかに走り去って行った。
騒がしいヤツだ。っていうかそろそろ1時限目始まるよ？

でも俺自身なんでモテるかとか聞かれても困るんだよね。

小学校も中学校でも全然モテなかったのに、片倉家にお世話になる
ようになってからモテ始めたよな。

「なんでですかね？」

「し、知らないわよ！」

葉子さんに聞いたら、少し顔を赤らめてそっぽ向かれてしまった。

「なんでですかね？ あきらさん」

「……」

あきらさんは何も言わずに少し顔を赤らめただけで自分の席に座った。

「何か言ってください…」

「それは大谷君がかっこいいからだよー！」

「はいはい、岡田さんありがとね」

岡田さんの頭をガシガシ撫ぜてやると、ツインテールの髪がぴよんぴよん揺れる。

「ひと目惚れなんだからー！」

「はいはい、ありが…え！？マジで？」

「マジで！」

無い胸を反らせて頬をピンクに染めて俺を見上げてる。

「っていうか何でこのタイミングでカミングアウトを…」

「デートするんだから気持ちを知っていて貰わないとねー」

両目を一瞬瞑って岡田さんも自分の席に戻って行った。今のっでもしかしてウィンクのつもりか…？。

…

「はあ…」

職員室の前でため息を付いているとガラッと唐突に扉が開いた。

「大谷君待ってたわよ」

なんで俺が居るって分かったんだろう…？　なんか寒気がしてきた。

「じゃあ、進路指導室行こうか」

俺を促して歩いていく園田先生の後を着いていく。
あれ？　なんか怒ってはいないみたいだな。

「さあ、入れ」

進路指導室のドアを開けて園田先生が振り返ると、その顔には満面の笑みが浮かんでいた。

こわっ！　俺…生きて帰れるのかな？

「あの…なんで隣に座るんですか？」

園田先生は俺を椅子に座らせると、何故か隣の椅子に座った。普通こういうのって対面で座らない？

「ふふ、そんなに固くならないで」

固くなるなって言われても、吐息がかかるくらい近くに顔があったら緊張するよ。

「ねえ、大谷君…いえ翔君、なんで私とはデートしてくれないのかなー？」

さらに園田先生の顔が近づく。

「せ、先生！ 近っ！ 顔近い！」

仄かに香る香水の匂いが鼻をくすぐる。

「先生と生徒ですよ！？」

するとスーと園田先生が顔を離してくれた。

「禁断の愛って憧れだったんだけどねー、しょうがないかー」

え？ それだけのためにデートしたかったの？

「別のところに憧れを持ってくださいよ、チョコレート投げとか、バケツ持たせて廊下に立たせるとか」

先生はちよつと小馬鹿にするように笑って言った。

「チョコレート投げる先生なんて見たことある？」

「ないっす…」

：

「ということで、デート相手がさらに1名追加されましたわ」

夕食後の談話時間？に、葉子さんから、京子さん、蘭ちゃん向けに報告を行なった。

「あらあら、翔君も大変ねえ」

京子さんは妖艶に笑っているけど、あなたもちゃっかりメンバーに入ってるじゃないっすか！

まあデート代は女性が出すことになっているので、俺の懐にはあまり影響が無いのが助かる。

さすがに蘭ちゃんの時は、俺が出したけどね。

っていうか菜摘さんが、さっきから涙目で何か訴えて来てるけど、なんだろう？

「わ、わたしもデート…」

「菜摘さんはダメよ」

電光石火で却下された菜摘さんは、ずーんと沈んだ雰囲気醸し出した。

「よ、葉子さん別に菜摘さんとはデートをしてたわけじゃないので…」

「あれはデートですよお」

ぷくっと頬膨らませてるけどさ、菜摘さんのために言ってるのに、自分で台無しにしてどうする！

「ふん、やっぱりね」

あゝあ、もうどうすることも出来ないね…。諦めろ菜摘さん！

「おにいちゃん、お風呂入ろう！」

「だから、ダメだよ…」

「やあだ！ 今日是一緒に入るんだもん！」

駄々をこねる蘭ちゃんは、今日は引き下がってくれなさそう…。

葉子さんにチラって目を向けると、しょうがないわねって感じで肩を竦めて見せた。

っていうかこういう時は、母親に目を向けるべきなんだろうけど…。

「蘭ちゃん、ちゃんと湯船に浸かって30数えるのよ？」

「はあい」

もうすでに一緒に入ること確定しているっぽいし。

…

「おにいちゃん、洗いっこしよう！」

一緒に湯船に浸かりながら、とんでもないことを言い出した。

「それはダメだよ…いろいろ制限されちゃうから」

「制限って？」

蘭ちゃんは小首を傾げながら、髪の毛の水分を両手で絞っている。

「蘭ちゃんはまだ知らなくていいから…」

「えー、つまんない！」

ぷくっと頬を膨らませて拗ねる。

「じゃあ、チュウしよう！」

「だからダメだって！」

両手の人差し指でバツテンを作り、蘭ちゃんの顔の前に出す。

「えー！ 菜摘ちゃんとはチュウしたのにわたしとはダメなの？」

「あれは事故だからね？ まさに接触事故、なんて…」

「おにいちゃん…それつまんない」

俺も上手い事言えてないのは分かってるけどさ、ちょっと冷たすぎない？

「それより、蘭ちゃんにちょっと聞きたい事があるんだけど」

「なあに？ すりーさいずは教えられないよ？」

自分で自分の体を抱くようにして、上目使いでこっち見てるけど。

「違うよ…」

10歳の娘のスリーサイズなんて、ほとんど変化無しじゃないの？
なんて言ったらまた拗ねるから言わないけどさ。

「蘭ちゃんは俺のこと…その…す、好き？」

「うん！ 好きだよ！」

ここまで直球で答えが返って来ると、清々しい。

「その…どこら辺が好きなのかと思ってさ」

「うーん…」

いっちょまえに腕組んで考え込んでる姿が微笑ましい。

「優しいところかな？」

優しいか…うーんでも優しいだけの人はいっぱいいると思うんだけど…。

「…それだけ？」

「うーん…」

「……」

唸ったつきり動かないけど、寝てないよね？

「分かんない…」

「え？」

すると蘭ちゃんの瞳に大粒の涙が溢れてきた。

「分かんない…うぐう…」

「分かったから、泣かなくても大丈夫だからね」

頭を撫でてやりながら、聞く相手を間違えたこと今更ながら気が付いた。

人を好きになるって理屈じゃないよな…蘭ちゃんにはちょっと難しかったか。

第9話：デート（京子編）

「翔君、そうよ、その穴に入れるのよ？ あら？ 外れちゃった？」

「ふふ、焦らないでいいのよ」

「そう、そこよ」

「いいわ、初めてにしては上手じゃない！」

「そ、そうですか？」

今日は京子さんとのデートでパチンコをしに来ています、期待を膨らませた皆様ごめんなさい。
って誰に報告してるんだろう？

「京子さんはよく来るんですか？」

「そうねえ…月に1回か2回くらいかな？」

その割には、来て30分で何箱も積み上げられてるんですけど…。

「食費稼ぎに来てるのよ」

「え…？」

俺たちの部屋代も破格だし、片倉家の食費が、どこから出てるのか疑問に思わなかったわけではないけど、まさかパチンコで稼いでいたとは。

「京子さんってパチプロなんですか？」

「違うわよ、昔はそうだったけどねえ、今は蘭もいるから」

「なんか、すみません」

自分達の生活のためでもあるんだろうけど、居候している自分が、なんとなく申し訳なくなってくる。

「何謝ってるのよ、息抜きにちょうどいいのよ」

そう言う俺の頭をガシガシと撫ぜるその優しい笑顔は、年上の大人の女性を感じさせられる。

「どうしたの？　なんか顔が赤いわよ？」

「な、なんでもないです…」

大人の女性にドキドキしてしまった胸の内を知られまいと、自分のパチンコ台に集中した。

「ふふ、変な子ねえ」

：

「京子さん幾ら儲かったんですか？」

換金してパチンコ店を出てきたところで聞いた。

「うーん、8万くらいかしらねえ」

は、8万って…。

「いつもそんなに儲かるんですか？」

「いつもはもっと儲かるわよ、というよりも儲けるわ！」

豊満な胸を揺らして、自慢げに笑ってる姿が勇壮に見えるのは何故？

「じゃあ軍資金も手に入ったことだし、ご飯食べに行きましょう！」

手に持ったお金をヒラヒラと揺らしながら、歩いていく背中を追いかける。

「翔君何か食べたいものある？」

思い出したように立ち止まって、急に振り返った。

「食べたいものですか？ え〜と…」

「私を食べたいとかダメよ？ まだ時間が早いからね」

人差し指を俺の唇に当てて、片目を瞑ってウィンクをする。うん、岡田さんとは違う完璧なウィンクだね！

「って言いませんよ、そんなこと…」

どこのオヤジですか？ っていうか時間が遅ければ言っていいいのかよ！ でも言わないけどね！

…

「あの…京子さん？　ここ高いんじゃないですか？」

少し名の知れたホテルの、最上階にあるレストランにやって来ていた。

「ん？　気にしない、気にしない！　たまにはいいでしょ？」

そう言うとき軽く手を上げウェ이터を呼ぶ。

「2人ともこのランチコースで、ワインは白ワインをお願いね」

「かしこまりました」

ウェ이터は軽く一礼すると、颯爽と動いていった。まさにプロと言った感じだ。

「翔君は分からないだろうから勝手に頼んじゃったわ」

「はい、ありがとうございます。って昼からワインですか？」

「ん？　ま、まあ食前酒って事でね」

何か少し動揺したように見えたけど、気のせいかな。

「そう言えば、京子さんがお酒飲むところ見たことないですけど」

片倉家に居候するようになってだいぶ経つけど、1度もお酒を飲むところを見たことが無かった。

「そうね、家では飲まないようにしているしね」

「え？ どうしてですか？」

「それは…あれよ…」

明らかに動揺しているな、なんなんだろう？

「お待たせしました、白ワインはこちらになりますますがよろしいですか？」

どこそこの何年もののワインとか説明してくれてるけど、俺にはさっぱりわからない。

京子さんが肯定すると、グラスにワインが注がれた。

「あ、あの…京子さん、俺ワインなんて飲めないですよ」

「え？ ああ、形だけでも乾杯しましょ？」

そりゃそうか1人じゃ乾杯できないし、って何に乾杯するんだろ…？

「じゃあ、私たちの、初エッチに乾杯！」

「初エッチに乾…、って何言ってるんすか！」

危うく復唱して乾杯するところだったよ！ 何この危険なワードは！ 普通貞操って女性が気にするものであって、男のほうは危険を感じてどうする！

「良いじゃにゃいの！ 減るみよんでもないしにえ！」

あれ！？ 京子さん、まだワイン1口しか飲んでないのに、ろれつが回ってないよ！

って目が据わってるし、しかも何故か睨んでるよ！

「翔もによめ！」

「だから俺ワイン飲めないですって！」

「私の酒がによめにやいっていうのきゃ！」

そういうと急にバタッとテーブルに突っ伏してしまった。

「京子さん？」

すーすーと寝息が聞こえてるところを見ると、寝ちゃったみたい…。
っていうか酒、弱！

ウェイターがスーッと寄ってきて、俺にキーを差し出してくる。

「なんですか？」

「片倉様はお部屋をお取りになられていますので、そちらにどうぞ」

何この手際の良さは！ もしかして常連なのか？

ウェイターの人に手伝ってもらい、京子さんを背中に背負うと、キーに書いてある部屋へと運んでいく。

部屋まで運んでベッドの上に寝かせたはいいが、どうすりゃいいん

だろうか…。

とりあえず服を脱がせるか？ 皺になって後で怒られても嫌だしな。

上着を脱がせブラウスのボタンに手をかけると、女性の服なんて脱がせたことないから、

緊張で手が震えていることに気付く。

「し、失礼します」

ブラウスを脱がせると、青少年の目に毒な豊満な胸が下着の中で自己主張をしていた。

よ、よし、次はスカートだ…。

ファスナーとフックを外しスカートを脱がせにかかる。

ピッタリしたスカートだったので、脱がせるのに四苦八苦していると…。

「もう、翔君、せっかちなんだからあ」

「え！？ い、いや、これは…」

だから何故このタイミングで目を覚ますか！

不意に頭を掴まれて、何かフワフワと柔らかい感触に包まれる。うわっこれ胸だ！ すごい柔らかい！

なんて喜んでる場合じゃない、い、息が出来ない！

「うぐぐ…」

く、苦しい…。

もう少しで失神しそうになると、ようやく開放された。

「翔君…むにゃむにゃ」

「って、寝てたんかい！」

「つか、むにゃむにゃって言う人初めて見たよ！」

とりあえず目に毒なので、布団を被せてようやく一息つくことが出来た。

「さて…どうすつか…」

まあどうするもこうするも起きるまで待つしかないよな…。

…

「ん…？　ここどこ？」

携帯いじったりして、時間を潰すこと約2時間、ようやくお目覚めのようなのだ。

「京子さん起きました？」

「あれ、翔君…ここどこ？」

キョロキョロと部屋の中を見回している。

「ホテルの部屋ですよ」

「え？　ホテルの部屋？」

まだ事態が把握できてないのか、目をパチパチと瞬いている。

「レストランで酔って寝ちゃったから、運んだんですよ」

「あちゃー、またやっちゃった」

額に手を置いて天を仰いでる。

「はい？」

「私、お酒がものすごく弱いよね」

「じゃあ…何で飲んだんですか？」

腕を組んで少し考える。その姿は蘭ちゃんもやってたな、さすが親子だ。

「久々のデートで浮かれていたから？」

「疑問に疑問で返されても、困ります…」

そこで京子さんは布団の中の自分の格好に気が付いて妖艶な顔になる。

「翔君、寝てる間に何か…した？」

「な、何もしてないっすよ！ 皺になると思って服は脱がせました
が…」

ふ〜んと言って疑いの眼差しを強くする。

「本当は？」

「本当ですよ！」

身の潔白を証明するように両手を挙げて降参のポーズをする。

「なあんだ…つまんない」

つまんないって言われても困るけどさ。

「今度は起きてるときに脱がしてね」

「お断りします！」

…

お酒飲んで頭が痛いって言うので、片倉家に帰ってきた。

「あれ？ おかえりー！ 早かったね！」

蘭ちゃんがスティック状のお菓子を咥えながら顔を出した。

「お酒飲んじやってね」

「あー」

あーって、やっぱり蘭ちゃんも京子さんの酒の弱さ知ってるんだ。

「でもママ、今日はあんまり酷くないね」

「それはホテルで休憩して来たからよ」

ちよつと待つて！ その発言なんか危険！

「そっかあ」

でも相手が蘭ちゃんで良かったと、ホツとするのも束の間だった。

「ホテルで休憩ですって！」

「ぎゃー！」

葉子さんのドスの効いた声がいきなり聞こえたので、思わず悲鳴をあげちゃったよ！

「翔君！　ぎゃって何よ！　ぎゃって！」

「えーと…ごめんなさい」

「そんなことより、ホテルで休憩ってどういうことなの！？　翔君」

般若のお面ってこんな顔だったよな、これで角が生えてたら完璧だったな。

「文字通り酔い覚ましに休んできただけでございます」

「翔君優しいのよ、洋服が皺になるからって脱がせてくれたのよ」

「…!?!?」

ちよ！　ここでそんな発言したら、俺の死亡フラグが立つちゃうよ！

「ぜ、全部脱がせたわけじゃないからね！」

「翔君、ちょっとあっちでお話しましょうね」

俺の手首を掴んでグイグイと奥の部屋に引っぱって行かれる。

京子さんに助けて目線を送るが、思い切り逸らされたよ！

京子さんがダメならと蘭ちゃんに助けて目線を送ったが、キョトンとした顔された…。

「な、何もなかったですよ！」

涙目で首をフルフルと横に振って抗議をしてみる。

「そんな捨てられた子犬のような目をしてもだめよ？」

「うぐ…」

くそ、逃げ道は無いのか!?!?

「蘭ちゃん」

「はい」

トタトタと足音がして、蘭ちゃんがやってきた。

「翔君にお仕置きをしてあげて」

「了解しました、隊長！」

敬礼する蘭ちゃんは可愛らしいけど、いつから葉子さんは隊長になったのですか？

「成敗！」

成敗ってそれ何か違うから！
空気を切り裂く音が聞こえたかと思ったら、俺の額に凄まじい痛みが走った。

「いだああ！」

体が3mほど飛んだ、と思うような衝撃だった。

なんで蘭ちゃん、あんなに小さな手なのに、デコピンがこんなに痛いんだ！

「何も無かったなら、このくらいで許してあげるわ」

いやいやいや、何も無かったんだから、デコピンも要らないじゃないか！ とか怖くて言えません。

第9話：デート（京子編）（後書き）

おそらく最初にぶち当たる壁に來ていると思われます。

次話が途中まで書いて止まってしまつてゐる。

外伝のようなものを書いて気分転換したほうがいいのだろうか：

第10話：デート（葉子編）

『ダメよ翔君…みんな見てるわ』

「葉子さん」

『見せ付けてやろうぜ』

今日の翔君は何でこんなに積極的なの！

『葉子、さあこっちにおいで』

「葉子さん！」

『ああ、翔君…』

「葉子さん起きて下さいよ！」

葉子さんの体をガクガク揺すって起こす。

パチッと目が開いたかと思ったら、両腕を俺の首に絡めて顔を近づけて来る。

「翔君…」

葉子さんはウツトリとした顔で目を閉じると、更に顔を近づけて来る。

「ちょっと！ 葉子さん！ 寝ぼけないで下さい！」

グイグイと引っぱられて、唇がくっつきそう！
不意に葉子さんの目が開いて、動きが止まる。

「葉子さん起きてもらえました？」

「……」

何か嫌な予感がするけど、腕が首に絡まってるので、身動きが取れない！

「きゃあああああああ！」

突然、空気を切り裂く悲鳴が轟いたと思ったら、俺の頬に強烈な痛みが走った。

「いだあ！」

早すぎて良く見えなかったけど、おそらく平手打ちを食らったのだろう。

ワナワナと体を震わせて、こっちを睨んでるが、何故！？

「翔君なにするのよ！」

「ええ！？ 俺はなにもしないっすよ！」

誤解されてるけど、どうすればこの誤解を解くことができるんだろう？

「何してるんだ？」

「あきらさん！」

あきらさんが女神に見えるよ！ 救いの女神ね。

「翔君が寝ている私にキスしようとしたのよ！」

「ち、違…」

首をフルフルと振ってあきらさんにアピールするが見ちゃいない！

「へえ！ 寝込みを襲うとは翔もなかなかやるな！」

「ち、違いますよ！ 出かける時間になっても、葉子さんが部屋から出て来ないので呼びに来たんです」

必死に説明をするが、必死になればなるほど、どつばに嵌っていく感が否めない。

「でも鍵を開けて部屋に入るのはどうかと思うぞ？」

「そうよ！ 鍵はどうしたのよ！」

「え？ 鍵は開いてましたけど…？」

「へ…：？」

葉子さんはキョトンとした顔をしたかと思うと、しばらく考えこんだ。

「か…わす…た」

「はい？」

すんごいちっさい声で何か言っただけど、聞き取れなかった。

「葉子、どうした？」

「うるさい！ 鍵掛けるの忘れたって言ったのよ！」

なんであきらさんがうるさいって怒られたのか分からないけど、
つ誤解は解けたかな？ 1

「はあ…：鍵は分かったが、キスは？」

「それは揺すって起こしたら、葉子さんから迫ってきて…」

「な！ わ、私がそんなこ…と…」

目を見開いて反論しようとしたみたいだけど、どんどん声が小さく
なっていく。

「もしかして、夢だと思ってたのが…」

「葉子？ 何ブツブツ言ってるんだ？」

「な、何でも無いわよ！ もういいでしょ！」

「なんだか分からないけど、葉子がいいならいいけどな」

あきらさんもそれ以上の追求は無理と判断したのか、小さく肩を竦めた。

「翔君、着替えるから出てって」

「あ、はい！」

俺はそそくさと葉子さんの部屋を後にした。

何故だか誤解は解けたようなので、一件落着なのかな？

「葉子、いったいどんな夢見てたんだ？」

「ゆ、夢なんて見てないわよ！」

「とか言いながら顔が赤いぞ？」

「う、うるさい、あきらも出てってよ！」

「はい、はい」

：

「翔君お待たせ、いきましようか？」

玄関で待っていたら、いつにも増して着飾った葉子さんが目の前にいた。

「はい、でも今日の予定聞いてないですけど？」

「行きたいところがあるの」

葉子さんが行きたいところってどこだろう？ 意外と想像がつかない。

「行きたいところってどこですか？」

「それは着いてからの楽しみということだ」

そう言うのと、スッと俺のまえに手を差し出してきた。

まさかお手をしろとか…じゃないよね？ でもとりあえず手を乗せてみる。

「何してるのよ！」

「え…？ いや…、お手かなって」

「はあ？ なんてお手なんてさせる必要があるのよ？ あんた犬？」

やばい！ 翔君からあんたに格下げされてる…。

「犬じゃないです…」

「分かってるわよ！ さっさと、て、手を繋ぎないさいよ！」

やっぱそうだよな、葉子さんの場合、ひと捻りありそうな感じなので、読み辛い。

でも顔赤くして命令されると、こっちも意識しちゃうんですけど。

「は、はい！」

手を繋いだと思ったら、足早に歩き始めたので、引っぱられる形になり、立ち位置が男女逆になっている。

なんか立場が弱い男みたいで嫌だな、っていうか実際に立場は弱いけどね。

：

「行きたいところって、この映画館ですか？」

「違うわよ、まだ時間が早いから映画を見るのよ」

そこは駅前にある映画館で、今上映しているのは、SF物、アクション物、恋愛物などがあつた。

「翔君、どれ観たい？」

どれがいいかな？

SF物のタイトルは「月からの使者、火星人」、月からの使者なら火星人じゃないだろ！

アクション物のタイトルは「ダイ・ランボー」、なんか混ざってるよ！

恋愛物のタイトルは「町の中で愛を叫んじゃう？」、範囲狭いよ！
っていうかそれただのバカップルだから！

「れ、恋愛映画ですかね」

「それって私に気を使って恋愛映画にしてる？」

「使っていないですよ？　今、上映しているのだとそれですね」

「葉子さんはどれが観たいですか？」

しばらく吟味するように映画のポスターを見ていたが、俺と同じ結論に至ったのか溜め息を吐いた。

「はあ…私も恋愛映画ね」

はっきり言って退屈な映画だったが、なんとか眠らずに乗り切ることができた。

葉子さんと言えば、最初から最後までめり込むように見ていた。

カフェで遅めの昼食を食べながら、さっき観た映画の話になった。

「なかなかいい映画だったわね」

「そ、そうですね…」

歯切れの悪い俺の反応にジト目で睨みながら話を続ける。

「まさか途中で主人公が変わるとは思わなかったわよね」

「そ、そうですね、あつと言わせる意味があったんじゃないですかね」

あれ？　ジト目で睨んだまま何も言わなくなったけど、なんだろう？

「そんなシーン無かったわよ！」

「えっ!？ あ、あははは」

カマをかけられて、ガックリと項垂れた。

「翔君、見てなかったでしょ…?」

「え! いや…その…」

「……」

「あ、は、はい、見てなかったです、ごめんなさい」

もうバレてるから素直に謝っところ。

：

昼食の後、ブラブラとウィンドウショッピングなどして、やってきたのがこのこじんまりとした所謂ライブハウスで、主にインディーズのバンドがライブを行なうところだった。

「葉子さんがこういうのに興味があったって意外ですね」

「そうかしら?」

「はい、クラシックとか聴いていそうな感じですよね」

「そ、そうね、クラシックも嫌いじゃないけど、メタル系のほうが好きね」

少し動揺したところを見ると、クラシックはほとんど聴かないみたいだな。

「ここのライブはメタル系なんですか？」

「日によって違うけど、今日はメタル系のバンドが出演する日ね」

一組目のバンドの演奏が始まるとその音で会話は出来なくなったので、演奏に耳を傾ける。

俺はあまりこういうの聴かないから良く分からないな。

何組かの演奏が終わり最後のバンドが現れると、葉子さんは目を輝かせてキヤーキヤーと騒いでいた。

あれがお目当てのバンドらしいな、ヴォーカルの顔は髪の毛で良く見えないがイケメンっぽい。

演奏の音で会話は出来ないけど、なんとなくほったらかし感があってなんか嫌だな。

「それでね、最後に歌ったバラードの唄がね、私の1番好きな唄なのよ」

「へえ」

「みんな格好良いんだけど、ヴォーカルの人が特に格好良いと思わない？」

「そうですね格好良かったですね」

ライブハウスを出てからも、葉子さんはしきりにさっきのバンドの話をしているけど、曲はおろかバンド名も知らなかったから、適当に相槌を打つだけだった。

でもここまで葉子さんのテンションが上がったところは、見た事が無かったので貴重だ。

「ちよつと、翔君ちゃんと聞いてる？」

「はい、聞いてますよ」

俺が少し投げやりに答えたので、葉子さんは小首を傾げて何やら考え込んでいる。

「翔君なんか怒ってない？」

「え？ 怒ってないですけど？」

ほったらかされていた感が強いので、思わず少し不機嫌に答えてしまった。

「そう？ なんかさっきからトゲがあるのよね、あ！」

何か思いついたようで悪戯をする子供のような顔してますけど、嫌な予感がプンプンするよ。

「な、なんですか？」

「もしかしてヤキモチ？」

「違います…っていうかなんでヤキモチ焼くんですか？」

「そ、そうね、つまないわね」

つまないって言われてもね…

「じゃあなんなのよ、男ならハッキリ言いなさい！」

「…なんか俺だけ浮いていた、というか付いていけてなかったの」

「あら？」

葉子さんは何かを感じ取ったようだった。

「な、なんですか？」

「もしかして寂しかったとか？」

「ち、違いますよ！」

ハッキリ言ってしまうばそうなんだけど、男としてのプライドが肯定を許さなかった。

「凶星みたいね」

「!？」

ダメだ！　なんか手の平で転がされている感じだ。

「翔君いい子いい子してあげるね」と言って俺の頭を撫で始めた。

「ちょ！ 恥ずかしいからやめてください！」

「ふふ」

なんかいつもの葉子さんじゃない！ なんてちょっとお姉さんっぽい笑みを浮かべてるんだろ？

「翔君ってやっぱりかわいいわね」

かわいいって言われて悪い気はしないけど、男ならやっぱり格好良いつて言われたい。

「じゃあ帰りましょうね」

「はい…」

だからそのお姉さん口調はやめて下さい、でも普段見れない姿を沢山見れたので良しとするか。

今度は葉子さんから自然と手を繋いで来たので、こっちも自然と手を繋ぐことができた。

：

「ただいま」

2人で玄関に入ると、やはり蘭ちゃんが真っ先に顔を出した。

「おかえりい」

「蘭ちゃんただいま」

ガシガシと頭を撫でてやると嬉しそうな顔で走って行った。

「葉子、遅かったじゃないか？」

「別に何もなかったわよ、翔君だし」

「まあそうだな、翔だしな」

え？ なにこの空気…、まるでダメダメだと言われている気がするよ。

「気がするんじゃないくて、ダメダメだと言っているんだが？」

「あきらさん、心を読まないでくださいよ！」

「翔って本当分かり易いな」

そんなに分かり易い顔してたのかな？　なんか納得いかない。

「それより夕食食べてないんだけど、何かある？」

「どうかな？　京子さんも2人は泊まってくると思って作ってなかったけど」

はあ…、なんで泊まってくると思ったのか小一時間問い詰めたい気

分だよ。

「あー、おかえりい」

「菜摘さんただいま」

「夕食食べてないって聞こえたけど私が何か作ろうか？
翔君だけに特別料理を作っであげ」

「却下よ」

「ふええ…！」

却下するの早！ 菜摘さんも有り得ない驚きかただな。
うわーんって走って行っちゃったよ…がんばれ！

「それなら私が作」

「翔を殺す気か？」

「……」

葉子さん黙り込んだじゃったけどそんなに酷いのか…。

「な、なによ、あきらだって大して変わらないじゃない！」

「うぐっ…」

なにこの不毛な戦い…

「葉子ちゃん、おにいちちゃん、チャーハン作ったから食べて」

「ありがとう、蘭ちゃんは気が利くな」

「えへへ」

「「……」」

2人共、10歳の女の子に惨敗だな。

「いだあ！」

葉子さんとあきらさんのダブルパンチ食らった。そして半眼で睨まれている。

目を合わせたら絶対狩られる！　っていうか抹殺されると思う。

「あ、あはは、お、お腹空いたな、チャーハン食べよ」

「そうね私もお腹空いたわ」

前から葉子さんに半眼で睨まれ、左横からはあきらさんに半眼で睨まれ、

右横では蘭ちゃんが両手で頬杖をついて、嬉しそうに笑って俺が食べるのを見ている。

何故か涙目の菜摘さんが後ろに立ってるのが怖いんですけど…。

これってあれだよね所謂針のむしろってやつだよね？　全然味わう余裕ねえよ！

番外編1..菜摘の休日（前書き）

番外編を書いてみました。

時系列で言くと翔とあきらのデートの日になります。

番外編1..菜摘の休日

「ふぁゝあ」

目をゴシゴシ擦りながら、時計に目をやると10時を少し過ぎたところだった。

「今日は何をしようかな…翔君はあきらちゃんとデートだし」

とりあえず顔を洗いに洗面所に行くと、蘭ちゃんが腕組みをして怒った顔で立っている。

「あ、蘭ちゃん、おはよう」

「菜摘ちゃん…」

蘭ちゃんはどこかにお出かけみたいで、外出の身支度を整えていた。

「蘭ちゃん、どこかにお出かけ？」

「はぁ…」

何故呆れたようにため息をつくんだらう？

「ん？」

「菜摘ちゃんとお買い物に行く約束…」

「そうなんだ、いってらっしゃ…ふえ！？」
「そうだっけ！？」

「忘れてたんだ…」

「わ、わ、忘れてないよ？ 覚えてなかっただけで…」

「……もつと悪いから！ とにかく待ってるから早く用意して」

「…は、はい」

そうだった、隣町に新しくオープンしたデパートに行く約束だった。

急いで顔を洗って、自分の部屋に駆け込む。

途中、何もないところでコケたけど、そんなの気にしている暇は無い。

なんとか20分で支度を済ませて、玄関にやってきた。

「遅い！」

プクッと頬を膨らませた蘭ちゃんがかわいらしい。じゃなく。

「ご、ごめんね」

「じゃあ、行こう！」

…

「うわー、思ったより大きな建物だね」

ショップやアミューズメント、レストランなどが全て揃っていて、建物も凄く大きい。

それにオープンしたばかりとあってかかなり混雑している。

「蘭ちゃん迷子にならないでね？」

迷子になったらもうめぐり合えないんじゃないかと思うほど広いから。

「その言葉そっくり返すよ」

「うぐっ…」

「いつも私が向かえに行ってるじゃん」

「……」

「菜摘ちゃんも高校生なんだからさ」

「と、とにかく見て回ろうよお」

「それもそうだね時間が勿体ないね」

2人ともたくさんお金を持ってる訳じゃないので、所謂ウィンドウショッピングが主体となる。

「なんかここ可愛い雑貨がありそう」

洋服や、アクセサリーショップを見たりしているとき、ちょうど目に入った雑貨屋だった。

「コックアードロードーなんて珍しいお店の名前だね、どういう意

味なんだろう？」

蘭ちゃんは店内をグルッと見回して、問いかけてきた。

「あ、それはね、ニワトリさんの鳴き声だよお」

「えー？ ニワトリさんは、コケコッコでしょ？」

「うん、日本ではね、でもアメリカではクックドゥードゥルドゥって言うんだよお」

「あ…そう読むんだ」

蘭ちゃんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「え？ それ本当ですか？」

「…は？ えっと…どなたですか？」

いつの間にか蘭ちゃんの横に店員っぽい人が立っていた。

「あ、すみません、ここの店長です。それでさっきの話し本当ですか？」

「は、はい、本当ですよお？」

「知らなかった…」

「えー！？ 知ってて付けたんじゃないんですか？」

「いや、なんか格好よさげな感じだったんで…」

「……」

どうしよう？ 翔君が居れば、迷わずツツコムんだろうけど…。

「でもいまさら店名変えられないし…そうだ、ニワトリ関連の商品を仕入れて…」

店長と名乗った人は、なにやらブツブツ言いながら奥に行ってしまった。

もしかしてツツコミが欲しかったのかな…？

結局この店では、小さい猫の置物と、蘭ちゃんとお揃いでレターセツトなどを買った。

「菜摘ちゃん、お腹空いたよ、何か食べよう」

雑貨屋を出たところで、蘭ちゃんがお腹を押さえながら、つらそうに言った。

「そうだね何がいいかな」

インフォメーションエリアにあるフロアガイドを手に取り、広げて探す。

「このパスタのお店なんかどお？」

最近パスタを食べていなかったから、パスタって文字を見たらむしろように食べたくなった。

「どれどれ、おいしいパスタのお店＜パスタ＞って、店名そのままだね…」

蘭ちゃんも特に決まった希望もないということで、パスタに決まった。

蘭ちゃんはカルボナーラを注文し、わたしはペペロンチーニを注文した。

半分ほど食べたところで蘭ちゃんが不意に聞いてきた。

「菜摘ちゃんっておにいちちゃんのこと好きだよね？」

「へ…？ おにいちちゃんって翔君？」

「うん」

蘭ちゃんは興味津々という感じで、目をキラキラと輝かしてこっちを見ている。

「えっと…好き…かな」

「やっぱりね、私の感だと葉子ちゃんとあきらちゃんも好きだと思う」

うう…やっぱりそうよね、私でも分かるくらいだから、周りも気づいているよね。

「ら、蘭ちゃんはどうなの？」

「大好きだよ」

蘭ちゃんは、その純粹さで、はっきり言えるからいいな。

「私たち4人の中から、翔君の相手が決まるのかな？」

蘭ちゃんに聞くのもなんか違うような気がするけどね。

「どうだろ？ ライバルは多いと思うよ」

「案外、全然違う人だったりね」

自分が選ばれたとは思うけど、それはそれで片倉家にいるほかの人とギクシャクしそうだし。

「翔君の好みのタイプってどんな人なんだろう？」

「そういえば聞いたことないね」

「でしょ？」

「今度聞いてみようよ」

「そうだね」

∴

パスタを食べたあとは、特に買ったものもなくウィンドウショッピングをして終わった。

それから翔君と唇が触れる事故があったりで、なかなか話す機会がなかったけど、ある時、暇そうにしていた翔君を捕まえて、蘭ちゃんと翔君の部屋に好みのタイプを聞きにいった。

「翔君の好みのタイプの女子ってどういう人？」

「え？　なに改まって？」

「いいじゃん、おにちゃん教えてよお」

「好みって別に普通だよ？」

「普通って？」

蘭ちゃんが必要以上に食い下がってる、がんばれ！

「そうだなあ」

翔君は少し天井のあたりを見ながら考え込んでいる。

「歳は自分より下がいいかな」

わたし撃沈：

蘭ちゃんがガッツポーズして、こっちを見てるのが恨めしい。

「あ、でもあんまり離れすぎてもアレかな？」

蘭ちゃん撃沈：

「あ、でも、好きになった人が好みかな？　って誰もいねえ！」

最後まで聞かずに蘭ちゃんと2人翔君の部屋をあとにした。

翔君が言った好みのタイプで言うと、片倉家には該当者なし。
クラスメイトも外れるから、今のところ該当者なしか。

好みのタイプから外れたけど、まだダメと決まった訳じゃないから、
がんばって翔君を振り向かせてやるぞお！

気合を入れて拳を突き上げた時、ふと横を見ると、蘭ちゃんも拳を
突き上げていた。

同じことを考えてたみたいだ。

第11話：デート（岡田さん編）

今日は葉子さんの諜報部員でもある岡田さんとのデートだ、一挙手一投足の情報が葉子さんに流れると思って間違いない。

だから滅多な事できないぞ、って滅多な事って何？

「大谷くん、おまたせー」

後ろの方から岡田さんの大きな声が聞こえてきた。

「別に待ってな…」

「どうしたの？」

岡田さんは事もあるうかランドセルを背負っていた…。

しかもここ駅前なんですけど、周りはみんな引いてるように見えるのは気のせいかな？

「それは？」

「え？ ああ、これにお弁当作って入れてきた」

無い胸を反らせて自慢げな顔をしているけど…。

「お弁当は判るけど、なぜランドセルなんだ？」

「ちょうど良かったから？」

「はあ」

ちょうど良かったからって言われてもね、しかも疑問系だし。

「とにかくそれは却下だ」

「えー!？」

えーって…考えれば分かるだろうに…。

「大谷君、こういうの好きかと思って」

「…俺がいつそんなこと言った？」

「え？ でも、小学生の女の子とお風呂入ってるって…」

「葉子さん…」

頭痛くなってきた、確かに入ったけど、それを岡田さんに話さなくてもいいのに。

「しょうがないかー」

岡田さんはランドセルを下ろすと、中からバスケットを取り出した。

「バスケットに入ってるじゃん！」

「えへへー」

バスケットを俺に持たせると、駅のコインロッカーにランドセルを

仕舞いに行った。

服装は小学生みたいだが、どんな服装しても小学生体型だからどうしようもない。

ここは目を瞑ろう。

デートも大分慣れてきたので、手を繋ぐくらいでは動揺しなくなってきた。

「!?!」

自然と岡田さんの手を取ると、一瞬ビクッとなった。

「あ、ごめん！ 嫌だった？」

「ううん、嫌じゃないよ」

顔を真っ赤にした岡田さんは、満面の笑みで答えた。

「そう？」

「うん」

「じゃあ、行こうか？」

「うん、行こう！」

岡田さんは元気いっぱいに拳を天に向かって突き出したけど、どこに行くか決めてなかった。

「つてどこ行くか決めてないけどどうする？」

「大谷君が行きたいのなら、どこでも…」

頬を染めて俯き加減で意味深な発言をするな！

「ゆ、遊園地でいいかな？」

「…う、うん」

なんか少し怒っている感じがするけど、気のせいかな？

それと遊園地ってあきらさんと行ったあの遊園地しか知らないけど、まあいいか。

：

「ここってDEAD OR DEATHが有名だけど、私ああいうのダメなんだあ」

良かった！ あれはしばらく乗りたくなかったから！

「大谷君は？」

「俺？ 俺は別に大丈夫だけど、今日は気分じゃないから」

「乗りたかったら私待ってるからいいよ？」

このいじらしさは葉子さんにも見習って欲しいね。

「いや、本当に今日は岡田さんとデートだし、1人で乗っても詰ま

らないからね」

「ありがとう！ あっぱり大谷君は優しいね」

岡田さんはうれしそうに俺の腕に自分の腕を絡めてきた。

あきらさんに死ぬほど乗らされたからなんだけど、そんなこと言えないのでちよつと後ろめたい。

腕を絡めても胸の感触は全然無いな、いや感触を楽しもうと思った訳じゃないよ？

船に乗って見ていくアトラクションや、汽車に乗って見ていくアトラクションなど、

絶叫系以外のアトラクションで、ゆったりとデートを楽しんでいた。

「次、あの観覧車乗ろうよ」

岡田さんは遊園地の中央に位置する観覧車を指差して言った。

「いいよ、乗ろうか」

ほとんど待ち時間も無く乗ることができた。

「大谷君…」

「ど、どうしたの？」

天辺付近に近づいた時、岡田さんは潤んだ目で俺を見つめてくる。すると不意に俺の胸に抱きついてきた。

「ちょ！ 岡田さん、落ち着いて！」

「…めなの」

「え？」

何か言っただけど、小さい声だったので何と言ったのか聞き取れなかった。

「私、高い所ダメなの！」

「えー！？ じゃあ何で観覧車乗ろうって言ったの？」

「ロマンチックかなと思って」

「……」

しょうがないので、しばらくそのままにさせてあげた。
降りる所に近づいても抱きついているので、引き剥がすのに苦労したけど、何とか離れてくれた。

「あゝあ、高所恐怖症治ってると思ったのになー」

それたぶん治らないから！

「そしたらね大谷君にね観覧車で迫られるの」

「……」

「翔子怖くないか？ こっちへおいでよって優しく言って抱き寄せ

るの」

「……」

「そしたら私は、みんなに見られちゃうよって言いながら、抱き寄せられて…」

「……」

「目と目があつた私たちは、そっと近づいてキッスをするの、キャー！」

「……」

えーと…どこからツッコめば？

「とりあえず、キッスって恥ずかしいからヤメレ」

岡田さんの頭にチョップを炸裂する。

「痛ー！」

岡田さんは両手で頭を押さえてしゃがみこんでるけど、スカートでしゃがむからパンツ見えてるよ…。

「岡田さん、スカート…」

「え？」

「だから見えてる」

「キャ！ 翔君のエッチ！」

あれ？ なんか違和感があつたけどなんだろう？

「えへへー、翔君って呼んじやった」

違和感はそれかー！

「まあどう呼んでもらってもいいけどさ」

「じゃあ、私のことは翔ちゃんって」

「却下だ、俺も翔だから変な感じだ」

「あははは、そうだったね、じゃあねー」

岡田さんは腕を組んで考え込んでしまった。確かに名前がカブってると呼び方って難しいよな。

「じゃあ、ハニー」「却下」

「翔子たん」「それはなんかヤバイ香りがする」

「しーちゃん」「恥ずい」

「しーたん」「恥ずい」

「うーん」「……」

「翔子ちゃん」「まあそれぐらいならいいかな」

とは言っても人前では恥ずかしくて呼べないだろうけどね。

「そろそろ時間もあれだし、帰ろう」

「えー？ まだいいでしょ？」

袖を掴んでの上目使いはやめてくれ、岡田さんは可愛い部類に含まれるので、それなりの破壊力があるから。

「で、でも、そろそろ暗くなるし、また今度にしよう」

「え！ また今度があるの？」

「いや…あるかも知れないし、無いかも知れない」

「ハッキリしないなあ、でもしょうがないか、翔君の周りには魅力的な人が多いもんね」

確かに個性的…いや魅力的な人はいっぱいいるけど…。付き合うとかだとちよつと違うかな。

：

「あの辺寄ってかない？」

待ち合わせた時と同じ駅に到着して、岡田さんが指差した場所は、

煌びやかなホテル街だった。

「寄ってかない」

「意気地なし」

「いやいやいや、そんな関係じゃないから！」

「体から始まる恋っていうのも」

「あり得ないから！」

世間的にはあり得ないとは言いい切れないけど、俺の場合はあり得ないと言いい切れる自信がある。

「冗談だよ、私だって好きになってもらってからがいいもん」

「冗談に聞こえなかったけど、そのほうがいいよ」

「そだね、じゃバイバイ！」

岡田さんは胸の前で小さく手を振ると小走りに走り去った。

やっと強制的なデートイベントが終わると思うと、開放的な気分になって足取りも軽い。

「ただいまー」

「おかえりー、みんな集まってるよ」

やっぱり最初に顔を出したのは蘭ちゃんだった。

「へ？ 集まってるってなんで？」

「？」

訳が分からずに食堂に入って行くと、全員勢揃いしていた。

「ど、どうしたんですか？」

とりあえず葉子さんに声をかけてみた。なんとなく長^{おさ}って感じだから？

「誰^{おさ}が長よ！」

何で分かったんだあ！

「それでみんなとのデートを終えて、どうだったのよ？」

「あ、あの…」

「菜摘さんは論外だから黙ってなさい」

「……」

酷い！ 菜摘さんは一応、葉子さんより年上なんだけど…。

「どうだったと聞かれても困るよ、それにみんなとデートする趣旨がまだ分かってないんだけど？」

「そ、それは、えーと…そうよ！」

急に女の子たちに囲まれて翔君も慣れるのに大変だろうから、それぞれを早く理解してもらうためによ」

その、いかにも今考えました的なところを、ツッコんだらいけないんだろうな。

「…それに、あれよ、彼女選びになるかも知れないから」

何かブツブツ言っているけど、全然聞き取れない。

「え？　なんですか？」

「な、なんでもないわよ！　で、どうだったのよ」

顔を真っ赤にして命令してるのが可笑しいけど、命がなくなるので言わない。

「そうですねー、普段では見れないところとか見れて楽しかったですよ」

普段では見れないところって言った瞬間に、あきらさんに睨まれました。怖かったです。

「誰とのデートが一番楽しかったのお？」

京子さん、その爆弾は投下しないでください！　答えによっては命の灯が…。

「そ、それは…」

「それは？」

周囲の空気が止まったように感じたけど、気のせいかな？

「みんな、それぞれの良さがあったので、1人だけ選ぶなんて出来ないです」

「翔君…」

「翔…」

「おにいちゃん…」

「え？ 俺なんか悪いこと言いました？」

訳が分からなかったので、京子さんに視線を向ける。

「優等生な答えね」

そう言われても、それが本当の答えだからどうしようも無いけど…。

「まあ、翔だからな」

「そうね、翔君だし、しょうがないわね」

え？ 何？ なんで蔑みの目で見られてるの？ 誰か教えてー！

第12話：夏の予定（前書き）

ゴールデンウィークやら旅行やらで更新する暇がありませんでした。
来週あたりにもう1話更新する予定です。（書き終われば）

第12話：夏の予定

「なあ、翔？ 夏はやっぱり海だよな？」

「…まあ、そうかな」

忘れているかも知れないので言っておくけど、久しぶりに登場したコイツは、

なぜか親友の杉崎健太郎。平凡を絵に描いたような男だ。

「だから平凡言うな！ それよりさ、海に行って女の子の水着を鑑賞しながら、夏を満喫しようぜ！」

「それ本音と建前が全部出ちゃってるからね！」

「海で女の子の水着鑑賞しないで何すんだよ！」

「……」

欲望丸出しのヤツと行ったら、同類だと思われかねないな。

「そうじゃなくて、相田^{あきら}さんと如月（葉子）さんを誘ってくれよ」

「なんで俺が？ お前に貸しを作った覚えはないぞ」

「大ありだよ、自分だけおいしい環境にいやがってよ！」

「く、苦しい！ 首を絞めるな！」

逆ギレ気味な親友がなぜか可愛そうに思えてきた：

「ちょっと、あんたらさっきから丸聞こえなんだけど？」

葉子さんがジト目で俺たちを睨んでいたの、健太郎のやつは俺の首から手を離すと、目を伏せて縮こまってるし。

俺の席でしかも結構大きい声でしゃべってたから、そりゃ聞こえるよね。

「私たちは、翔君が誘ってくれるなら行くわよ、ね？ あきら」

「え？ うんまあ、そのゴミ虫の目的はアレだけだな」

そう言うときあきらは、汚い物でも見る目で健太郎を見てる。

「翔、ゴミ虫って言われてるぞ？」

「お前だよ！ 健太郎！」

「なんでだよ！ ひどいよ！ それより頼むよ、翔」

健太郎は、そう小声で言うと、手を合わせて懇願してきた。まあ、たまにはいいか。

「じゃあ、葉子さん、あきらさん、夏休みに海へ行きましょう」

「わかったわ」

「わかった」

「よっしゃー！」

「ちょ…声大きいから！」

葉子さんに睨まれた蛙、じゃない健太郎は口を手で押さえたまま、どこかに走っていった。

なんでやつはいつもどこかに走り去って行くんだ？

「翔君、私も行く！」

「岡田さん、どこで聞いてたの？」

「ひどーい！ 葉子ちゃんの横に座ってたのに！」

「え？ あ、ごめん…見えなかった」

岡田さんは葉子さんの影にすっぽり収まるくらい小さいので見落としてた。

「そうなるとう当然、菜摘さんや蘭ちゃんなんかも誘わないと悪いよな」

「そうね、翔君が誘いなさいよ」

「は、はい」

独り言を言ったつもりだったのに、葉子さんは地獄耳で聞き取ったらしい。

「翔君？ 少しお話しが必要かしら？」

「い、いえ、とんでもない」

また心を読まれた！ 俺ってそんなに顔に出易いのだろうか？

：

あきらさんと葉子さんはどこかに寄って行くらしく、下校は菜摘さんと2人だった。

「そうだ、菜摘さん、夏休みに海に行きましょう」

「え！？ そんな2人きりで海なんて…」

頬を赤く染めて遠い目をしてますけどね。

「違いますよ！ みんなですよ」

「え？ なーんだ…」

菜摘さん、本屋の件があったのに、まだ懲りてないのだろうか？

：

そして片倉家では、蘭ちゃんに声をかける。

「蘭ちゃん、夏休みに海に行こう」

「え？ 2人だけで？」

「……」

「おにいちゃんどうしたの？」

「いや、少し前の出来事のデジャブが起こってたから」

「？ やっぱりみんなだよね？」

「そうそう」

そこでふと京子さんも誘ったほうがいいのだろうかと思ったので、
蘭ちゃんに聞いてみた。

「それと京子さんは行くかな？」

「ママはどうだろ？ 日焼けはお肌の敵って言ってるから、行かないかもね」

「行かないわ」

「うわ！」

「キャ！」

「いつの間に後ろにいたんですか！？」

「え…さっきからずっといたけど？」

「全然気付かなかった…」

「娘が男に誘われてるから気になってね」

「男って…」

「ま、蘭のことお任せするわね、色々と」

色々ってなんだ？　ってツツこんだら地雷踏むんだろうな。

「わ、わかりました」

：

ということ（どういうこと？）、みんなで水着を買いにデパートに來ています。

別に今持っている水着でいいじゃんというのは、男だけで女性陣はそうもいかないらしい。

葉子さん、あきらさん、菜摘さんが、ああだこうだ言いながら水着を選んでる。

蘭ちゃんと岡田さんは子供用水着を見ながら、ああだこうだ言っている。

「岡田さんはそっちじゃないでしょ？」

「ええ！　大人用だと脱げちゃうもん」

「それほど小さいのか…」

男性用水着も置いてあるけど、健太郎のやつは誘われてないから、なんか俺1人だけ場違いじゃない？

「翔君、これどう思う？」

葉子さんが少し派手めのビキニを着て立っていた。

「…良いと思いますよ」

試着する度に見せられるのは嬉しい…じゃなく、女性の水着ってどれが良いのかよく分からないから困る。

「翔、これどう？」

あきらは大人しめのワンピースの水着を着ていた。

「あきらさんっぽくて良いと思いますよ」

「翔くん、見て見てー」

今度は菜摘さんが手招きしてるし…っていうか俺の意見って参考にしてるのかな？

ただ聞いているだけで、結局最後は自分で決めるんでしょう？

「!？」

「ど、どうかな？」

最初に目が行ったのは、頬を染めてもじもじと恥ずかしそうにしている菜摘さんの顔、ではなく。

たわわに実った自己主張をしている二つの丘、簡単にいうとおっぱ
…胸だった。

「な、菜摘さん！ その水着小さくないですか！？」

「ええ！？ サイズ的には一番大きいカップの水着だけど？」

「…そうなんだ」

「おにいちゃん」「翔君」

「「さいてー」」

岡田さんと蘭ちゃんが綺麗にハモってるね、って言ってる場合じゃ
なかった。

「え！？ な、何が！？」

「さっきから菜摘ちゃんの胸ばっかじーっと見てさ！」

菜摘さんの胸に釘付けになっていたのを、しっかりと見られてた。

「そ、それは、おと、男としてはしょうがないんだよ！」

「翔君、動揺しすぎ…」

葉子さんが冷めた目でこっちを見てるけど、男はしょうがないんだ
よおお。

「そ、そんなことより、蘭ちゃんと岡田さんは試着しないの？」

「やだあ！ 私達の水着もやらしい目で見るとでしょ？」

「見ないから！」

「どうせ私達なんて菜摘ちゃんと比べたらエベレストと平地、って誰が平地よ！」

岡田さんいつになく興奮してるな、1人ツツコミまでして…。

「お、岡田さん落ち着いて」

「おにいちゃん、私と岡田さんはもう決まってるからいいの」

「え？ でも何も買ってないよね？」

「うん、それは見てのお楽しみね」

なにか嫌な予感がするけど、まあそこは深く掘り下げないでおこう…。

「すみませーん、これより大きいカップのはありませんか？」

菜摘さんが声をかけると、女性店員が音もなく現れた。忍者？

「申し訳ございません、当店ではそちらの商品が最大サイズとなっております」

「そうですか…」

「もしご必要でございましたら、アメリカの店舗からお取り寄せ致しますが？」

「じゃあ、お願いしようかな」

「かしこまりました」

へえ、この店、アメリカにも店舗持ってるんだ。意外だな。

「私はコレに決めたわ」

意外にも葉子さんが真っ先に決めたようだ。

「私は最初からコレに決めてた」

あきらさんは事前にリサーチ済みだったようだ、あきらさんらしいな。

「ああ：わたしだけまた来ないと、1人で来れるかな」

と俺の顔を見ながら小声で言ってるし：。

「分かりました、その時は付き合いますよ」

別に後ろめたいことはないのに、つい小声で答えると、菜摘さんは「うん」と頷いて嬉しそうに満面の笑みを漏らした。

第13話：海にきました（前書き）

生活環境が変わった影響で、執筆する時間がほとんどありません。
今回の話は短いですが、コツコツ書いていたものです。

第13話：海にきました

「はい、じゃあこの辺にパラソル設置しましょう」

「ひゃほーい！ 海だ！」

健太郎は、パラソルを砂浜に挿すと、海に向かって走っていった。とりあえず荷物置いて水着に着替えてからにしろよ！

「あの：園田先生？ なぜここにいますか？」

「翔君、何を今さら言ってるのよ？ さっきまで普通に接してたじゃない」

「そこはサラッと流してくださいよ」

「ごめんね翔君、先生に話したら、私も行くって言って聞かなくて岡田さんは申し訳なさそうに、手を合わせて、片目を閉じて謝ってる。」

「まあ来ちゃったものはしょうがないよ、それに園田先生なら別に構わないでしょ」

「それは先生としては喜べないセリフね…」

「え？ どうしてですか？」

「真の教育者は、生徒に好かれ過ぎてはいけないような気がするの」

「どうしたんですか？　頭でも打ちました？」

「打ってないわよ！　正気よ！　さっき缶ビール飲んだけどね」

園田先生と話している間に他の女性陣は着替えを済ませてきたよう
だ。

「翔君、どう？　私達の水着は？」

ビキニの葉子さんと、菜摘さん、ワンピースのあきらさんは、煌び
やかな雰囲気がある。

蘭ちゃんと岡田さんはスクール水着…

「ってなんでスクール水着なんだよ！」

「翔君こういうの好きかなと思って、小学校の時の持ってきたやつ
た」

「そりゃ嫌いじゃないけど、小学校から体系変わってないのか！？」

小学校の時の水着が着れるなんて、どんだけ成長してないんだよ！？

「ちょっと翔君？」

「はい？　なんですか葉子さん？」

「スクール水着が嫌いじゃないってどういうことよ！」

「え！？ そんなこと……言った気がする」

「ザワザワ、ヒソヒソ」

「ちょ、先生！ 変な効果音入れないでくださいよ！」

「うひょー！ たまんねー！ おお！ スクール水着もいいねえ」

いつのまにか健太郎が俺の横に戻ってきていた。

「えっと…俺、いや僕何か悪いこと言いましたか？」

俺を除いた全員が白い目で健太郎を見ている。

健太郎よ、空気を読め！

「いっぺん死んで来い！」

あきらさんの鉄拳が健太郎の左頬に炸裂し、憐れ健太郎は星になりました。

「なってねーよ！ ここにいるよ！」

「チッ！」

あきらさんの鉄拳を食らって、しゃがみ込んでいただけだった。残念。

「舌打ちすんなよ、余計悲しいよ…」

まあでもコイツのおかげで、俺のスクール水着嫌いじゃないけど発言は忘れられたみたいで良かった。

「翔君帰ったら、少しお話があるから」

ひい！ 忘れられてなかった！

「健太郎…着替えて来ようぜ」

「あ、ああ、そうだな…」

「まあアレだね、翔君も男だったってことね」

先生フォローありがとう！

「木下（菜摘）さんの胸と、岡田さんのスクール水着ばかりチラチラ見てたわ」

前言撤回！

「「もう翔君ったら！」」

菜摘さんと岡田さんがハモって、頬を赤く染めている。

「むう！ なんで私のスクール水着じゃなくて岡田さんのほうなの！」

「蘭ちゃんもあと2、3年もすれば、翔君も見えてくれるわよ？」

「えー」

2、3年じゃ早すぎるだろ…とツツコミつつ更衣室のドアを閉める。

更衣室まで結構距離あるのに、どんだけデカイ声で話してんだよ！

「なあ翔？」

「うん？」

「俺、水着になったら暴れ狂うマグナムを隠せなさそうだよ！」

「下ネタかよ！ お前のはピストルだが、Tシャツでも着て隠せ」

「ピストルって響きがなんか軽くてヤダね」

さて…俺もTシャツ着とくか。

「お前もじゃん！」

「……」

第14話：いつもの俺たち

「はい、お兄ちゃん！ あーん」

「あ、あーん…」

おもむろに開けた口にヤキソバを押し込まれる。

「むぐう！」

ちよ…これいっぱい入れすぎだから！
って言うか喉に詰まった！

涙目で蘭ちゃんを見ると、心配そうな顔で覗き込んでいた。

「お兄ちゃん！ 誰に泣かされたの！？」

いや、あのね…そんなことより

「むぐう！ むぐう！（水！ 水！）」

「え？ 蘭…好き？」

赤くなってるけど、そんなこと言ってないから！

ダメだ、そばにいる菜摘さんに助けを求める。

「むぐう！ むぐう！（水！ 水！）」

「え？ なぁに翔君？」

「むぐう！ むぐう！（水！ 水！）」

「え？ 菜摘：好き？」

なんでやねん！ 言葉は出せないけど手の甲で菜摘さんの胸にツツ
コミを入れる。

「ひゃう！」

ひゃう？ 菜摘さんもツツコミ入れたくらいでそんな声出さなくて
も。

「ほら！」

目の前にペットボトルの水が出てきたので、すぐに引っ手繰るよう
に受け取りガブガブと水を飲む。

「ぷはぁ！ 死ぬかと思った！」

振り返るとあきらがさんが照れくさそうな顔で立っていた。

「あきらさんありがとう！ 助かったよ！」

「ああ、無事で何よりだ」

「そ、それより、翔：後ろ」

「ん？ 後ろに何か？」

そういつつ何気なく振り返ると、般若のお面があった：
じゃない葉子さんの憤怒の顔があった！

「なななんですか、葉子さん！」

「動揺しすぎだから」

園田先生、そこで冷静なツツコミは止めてください！

「さっき菜摘さんの胸、触ったよね!？」

「え！ 触ってないですよ！ 何言ってるんですか！」

あれ？ 何かが脳裏を掠めたような：

ひゃう！

「ああ！」

「もう翔君ったらそんなに触りたいなら、誰も居ないところで…」

「違うから！」

「じゃあ翔君、スクール水着好き疑惑もあるし、ちょっと向こうで
お話ししましょうね」

耳を引っ張られて、連れて行かれる。

「翔！ まあがんばれ…」

何をだよ健太郎！

そして…

「ぎゃあああああああああ！」

「翔…これでも飲め」

そう言って健太郎が缶ジュースを差し出す。

「なあ翔」

「なんだよ」

「お前はもうちょっと考えて行動したほうがいいぞ」

いつになく健太郎が真面目なことを言う…

「きもっ！」

「なんでだよ！　そうじゃなくて胸触るにももうちょっと分からないようにだな…」

「違うっつーの！」

「それで感触はどうだった？」

「それはもう…って何言わせようとしてんだよ！」

「いいよなーお前は常に美女&美少女がそばにいてよー」

遠い目をして話す健太郎は、涙ぐんでいる。

そんなにか？

「くそ！ 泳いでくる、うおおおおお！」

健太郎は急に立ち上がると海に猛ダッシュしていった。元気なやつだ。

「翔君…」

後ろから声がしたので振り返ってみると、大きな胸が…じゃない菜摘さんが立っていた。

「菜摘さんどうしたんですか？」

「隣、座っていいいい？」

「いいですよ」

すると菜摘さんは、俺にぴったりくつつくように座った。

「な、菜摘さん近いですよ」

「わたしがそばにいるのは嫌？」

「そ、そんなわけないじゃないですか」

「それなら良かった」

心底安心したような表情をする菜摘さんはかわいらしい。

「それより何かありました？」

「ううん、翔君と過ごせる夏休みもこれが最後だなんて思って…」

そうだった、菜摘さんは1学年上だから、今度の春が来たら卒業して行ってしまう。

「菜摘さんは大学行くんですか？」

「一応そのつもり」

「なら片倉家に居ますよね？　また遊びにこれますよ」

「翔君は知らないんだ」

「何をですか？」

菜摘さんは寂しそうな表情して海を見つめながら話す。

「高校卒業したら、片倉家を出て行かないといけないの」

「えっ！？ 何故ですか？」

「始めからそういう契約だったのよ」

「そうなんですか…でも、京子さんに言えば何とかなるんじゃないですか？」

「そうかなあ？」

「そうですよ」

すると菜摘さんは、ぱあっと明るい顔になった。

「そうだね！ わたし少し元気が出てきたかも」

「はい、元気なほうが菜摘さんらしいです」

「皆のところ戻るけど、翔君はどうするの？」

「そうですね、戻りましょうか」

「うん」

それから俺たちは、夕日が辺りをオレンジ色に染めるまで遊んだ。

第15話：秋の夜長

季節は夏を過ぎ秋の到来を告げていた。

「あ、あの：京子さん」

夕食後の団欒のときに菜摘さんがモジモジと京子さんに話しかけた。

「ん？ なぁに菜摘ちゃん、私に愛の告白？」

「ち、違います！ あの：来年の話なんですけど…」

「来年？ 来年なにかあったかしら？」

右手の人差し指を唇に当てて考え込む京子さんだが、なんでこの人はいちいち色っぽいかな。

「あ、あの、卒業してからのことなんですが…」

「あら、もうそんなに経つのね」

「最初の契約では、卒業までって約束でしたが、卒業してからも住まわせて貰えないですか？」

「それがね、来年の新入生の子が1人入居することになってるのよ…」

「え！？ そそそそうなんですか…」

動揺しすぎだからと突っ込むところだけど、これはしょうがないか…。

「次の人が決まっていなかったら、そのまま住んで貰っても構わないんだけどね…」

「……」

「じゃあ、翔君の部屋に住む？」

気まずい沈黙を破って京子さんがおかしなことを言い出した。

「え！？　　お、俺が出て行くってことっすか？」

「ううん、翔君と菜摘ちゃんと同じ部屋に住むってことよ」

「「却下！！」」

葉子さん、あきらさん、蘭ちゃんが一齐に異議を唱えた。っていうか息合わせすぎだから！

「やっぱりそうなるわよね、惜しかったわね翔君」

「何がですか？」

「一緒に住めば毎日あんなことやこんなことできたのにね」

「えーと…」

ツツコミどころが多すぎてどこからツツコめばいいんだ…？

菜摘さんを気遣ってワザとそんな冗談を言ったのかも知れないけど、この状況とタイミングで良く言えたな。

フラフラと菜摘さんは食堂を出て行ったけど、大丈夫かな？ 後で様子を見に行ってみよう。

「それで新入生ってどんな人ですか？」

「かわいい女の子よ」

と言って意味深に微笑みかけるのはやめてください、鋭い視線が突き刺さるんで…。

「知り合いの方ですか？」

「正確には知り合いの娘さんね、何年か前に1度会ったことがあるけど清楚な感じの娘だったわよ」

「清楚…へ、へえ」

「お、清楚に食いついたか翔」

「ちょ!?! 違いますよあきらさん!」

「違いますよって、顔がニヤけてんだけど?」

「うぐっ…」

「ライバル出現ね!」

「え？ 葉子さん何か言いました？」

「な、なんでもないわよ！」

：

コンコン

「菜摘さん」

コンコン

「なつ…うわっ！」

音もなくドアが開いたので、めっちゃめっちゃびっくりした。

「じょうぐんのうぞづぎ…ぐすっ…」

「え!？」

泣き濡れて髪の毛がぼさぼさの、菜摘さんのうらめしげな顔がそこにあった。

っていかじょうぐんって誰ですか？ とか言える雰囲気ではないね。

「いや、まさか次の入居者が決まっているとは知らなくて…その」

ジトっと半眼で睨むのはやめてください！

「い、ごめんなさい」

次の瞬間菜摘さんが倒れ掛かるように俺に抱きついてきた！

「ちょ！？ なつ、菜摘さん！？」

「か、かん、関係を持ってしまえば…」

菜摘さんは何やらブツブツ言いながら、俺を部屋に連れ込もうとする。

「菜摘さん！？ おち、落ち着いて！」

その時、救世主の声が、もとい蘭ちゃんの声がした。

「お兄ちゃん、何してるの？」

「あ、蘭ちゃんちょっと助け…」

「ずるい！ わたしも遊ぶ！」

というやいなや、俺の背中にしがみついてきた

「いや…あのね…遊んでるわけじゃないんだけど」

「うわ！」 「キャー！」

2人に挟まれてバランスを崩し、蘭ちゃんもろとも菜摘さんの部屋になだれ込んだ。

何がどうなってそうだったのか分からないけど、蘭ちゃんにキスしている俺がいた。

「んぐっ！」

すぐに唇を離れたけど、蘭ちゃんはうつとりとした顔をしている。

「今日のお兄ちゃんは積極的…」

今日のってところが引つかかるが、恐る恐る菜摘さんを見ると、赤い顔して目を吊り上げていた。

「翔君やっぱりロリコ…」

「違うから！？　今のは完全に事故だから！　ね！　蘭ちゃん？」

「私の初めてをお兄ちゃんに奪われちゃった…」

聞いてないし…っていうかその言い回しはいろいろ誤解を受けるから止めてくれ…。

「なんですってー！？」

ほらね？

「って葉子さん！？」

「翔君やっぱりロリコンだったんだ」

「やっぱりってなんですか!？」

なぜロリコンだと思われているのかいまち理解できないんだけど。

「翔がそっち系の人だったとはな、今後少し考えねばな」

「だから違うんですってあきらさん！」

「そんな事より、蘭ちゃんの初めてを奪ったってどういうことよ？」

そんな事って…結構大事なことのようない気がするんだけどね。

「お兄ちゃんにキスされちゃったー、えへへー」

「な!？　　んですってー!？」

「じじじじじじじ事故だから事故」

「翔、動揺し過ぎ…」

「お兄ちゃん、この責任は取ってくれるんだよね？」

「責任!？」

潤んだ目でそんなこと言われても困るんだけどさ。

「そうね蘭を傷ものにしたんだからしょうがないわね」

「傷ものってそんな大げさな…っていうか京子さんいつの間に来たんですか!？」

「さっきから居るけど？」

だめだ、動揺しすぎてて全然気づかなかった。

「蘭が16歳になったら結婚式を挙げましょうねー」

「やったあー！」

ぴよんぴよん元気に飛び跳ねる蘭ちゃん、スカートが捲れてパンツ見えそう…って違う違う！

「結婚式！？ そんな…」

「っていうのは冗談だけどね」

「……」

「翔、ツツコミ忘れてる」

忘れてるんじゃないかって呆れてるんだけど…。

「つまんない！」

ぷうっと頬を膨らまして、いじける蘭ちゃん。

「せっかくドサクサに紛れてキスしたのにな…」

事故じゃなく蘭ちゃんが故意にキスしたんじゃない！

「じゃあ翔君、ちょっと向こうでお話しましょうね？」

「ええ！？ だから違いますって、蘭ちゃんが…」

「言い訳は後で聞くわよ！ 早く来なさい！」

後では遅いんだけど…。

「京子さん！ た、助けて！」

「あらあら、大変ね」

くそう、完全に楽しんでるな。

そして…

「ぎゃあああああああああ！」

秋の夜空に翔の叫び声だけが響き渡った。

第16話：翔の気持ち裁判

「なあ翔？」

「なんだゲンゴロウ」

「健太郎だよ！ 人だよ！」

「で、なんだよ」

「如月（葉子）さん達の中に好きな娘居るのか？」

「なんだよ、唐突に、っていうか声でけーよ」

慌てて葉子さんの方を見ると友達と談笑中なので、聞かれてはいないだろう。

「いや、あれだけモテモテなのに、決まった彼女とか作らないからさ」

「モテてねーよ、単純に弄られてるだけだよ」

「そうか？ 俺にはモテてるようにしか見えないけどな」

「気のせいだって」

「で、どうなんだよ？」

「うーん、みんな魅力的だとは思うけど、彼女ってなるとなんか違

うなあ」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ、たぶん」

「たぶんかよ！」

確かに葉子さんたちは容姿端麗だし彼女にするには申し分ないとは思うけど、
何かが違うと感じてるんだ。

夕食を終えて部屋で寛いでいると、蘭ちゃんがドアを開けてひよこ
っと顔を出した。

「ん？ どうしたの？」

「あのね、葉子さんたちが呼んでるよ？」

「へ？ なんで？」

「分かんない」

「何だろ…」

「行こ、お兄ちゃん」

蘭ちゃんがすっと手を差し出してきたので、手を乗せてみる。

「お兄ちゃん、お手…て違ふよ！」

「冗談だよ」

「もう！ 早く！」

「そんなに引っ張らなくても行くからさ」

蘭ちゃんと手を繋いで食堂に行くと、何故か机がコの字に並べられていて、

机の無いところに葉子さんが立ち、コの字に並べられ机にあきらさん、菜摘さん、

京子さん、岡田さん、園田先生が座っている。

なんか多くない？

「って岡田さんと先生は何してんですか！？」

「何って葉子ちゃんに呼ばれたんだけど？」

岡田さんは、何か問題でも？というように、無い胸を反らしている。

「私は面白そうだから来てみただけ」

「そんな理由で来たんですか、先生…」

「そうよ」

そうよってしれっと言われても困るんだけどさ。

「被告人前へ」

何故か寒気がするほど冷たい葉子さんの声。

「へ？ 被告人って誰？」

キョロキョロしていると

「翔君よ！」

「ああ、そうか…って俺！？」

「つて言うか前ってどこ？」

「そこよ！」

と指差したのはコの字に並べられた机の真ん中で、ちよどこみんなが俺を
囲んでいるような感じになった。

「葉子さん、あの…いったい何が始まるんですか？」

「被告人、私語は慎みなさい」

「あきらさんまでどうしたんですか？」

「…」

え？ なんて無視！？

「それでは、翔君の『彼女ってなるとなんか違うなあ』発言に対する裁判を始めます！」

あれか！？　っていか聞いてたのか！？

あの時、葉子さんは友達と談笑してたはずなのにどうして！？

「証言者、前へ」

おずおずと食堂に入ってきたのは、健太郎だった！

「よう！　翔」

「お前か！」

「なんか色々聞かれたんで、全部話しちゃった」

テへって顔してるけど、全然かわいくねーんだよ！　まったく！

「えーと…うじ虫くん？」

名前を忘れてるはいいとしても、うじ虫って酷いよね？

健太郎は両手で顔押さえて泣いてるしさ、まあ、どうでもいいんだけど。

「『彼女ってなるとなんか違うなあ』と、発言したのは、本当なの？」

すると健太郎は、パツと顔を上げて「本当です！」と力強く言った。

泣いてないのかよ！ あ、もしかして罵られて喜んでたのか？ 変態め！

「え？ 翔君どういうこと？」

菜摘さんが少し涙目になりながら問いかけてきた。

「いや、アレはその…」

「あの約束は嘘だった？」

「つていうかなにも約束なんかしてないでしょ？」

すると菜摘さんはぷうつと頬を膨らませてしまった。

「お兄ちゃん…」

蘭ちゃんも涙目、つていうか泣いてる？

「た、確かに言いましたけど、でも今のところはそうだというだけですよ…」

「保証できるの？」

葉子さんは半眼で睨みながら聞いてくる。

「ほ、保証は…できません…」

「死刑！」

「なんで!？」

第17話：夜の散歩（前書き）

今回はちょっぴりシリアスです。

第17話：夜の散歩

夕食の後、菜摘さんに散歩に誘われて夜の街を散歩中。

「翔君：もうすぐお別れだね」

「大げさですね、卒業しても会えることは会えるでしょ？」

「うん：」

菜摘さんは、いつもの元気がない。

「菜摘さんが大学生かー、あんま想像できないですね」

「うん：」

うーん、おどけて言ってみたけど対して効果なかったか。

「翔君：あの：あのね」

「はい？」

「こないだの裁判みたいので、翔君が言ったことってやっぱり本心なの？」

裁判みたいってか、完全に裁判だったよね？

「あんま思い出したくないですけどね、アレは」

「あ、ご、ごめんなさい」

「いえ、でもあれは本心ですよ」

「そうなんだ…」

「はい…」

えーと…今日は沈黙がとても辛いのは为什么呢？

菜摘さんはさっきから何か考え込んでいるような、悩んでいるような感じで、時々俺の顔を見てはため息をついている。

あの…人の顔見て、ため息つかないで欲しいです、マジで。

「し、翔君！」

「ひゃい！」

はいを、囁んじゃったよ、だって菜摘さんが俺の腕をつかんでいるんだけど、2つの柔らかい感触も一緒に付いてきたから。

それでもって下から切ない顔で見上げられたら、破壊力ハンパないっす。

「わた、わたしは翔君が…」

「はい？」

「んと…その」

「菜摘さんどうしました？」

菜摘さんはモジモジとして、何かを伝えようとしているように見える。

「わ、わたしは、し、翔君が好き！」

「ありがとうございます、俺も菜摘さん好きですよ」

「えっ!？」

「葉子さんもあきらさんもみんな好きです」

「なんだ…」

なんだって何だ…？

「もう！ 翔君はどうしてそんなに鈍感なお！」

「え…？」

菜摘さんは何を怒ってらっしゃるのでしょうか？

「翔君のことを異性として好きなお！」

「異性として…って」

「えっ!?!? それって…えっ!?!?」

「そんなに動揺することないと思う…」

そんなの全然気づかなかったよ。 やっぱ俺って鈍感なのか…。

「でも、俺は…」

「何も言わないで…分かっているから、ただ気持ちを伝えたかっただけの」

「うん…」

既に泣いている菜摘さんの顔をまともに見ることが出来ない。

「でも菜摘さんなんで俺なんか、何もとりえとかもないですけど?」

「翔君は最初から今まで優しかったから…」

「え?」

「わたしってしゃべるのも歩くのも、何をするのもトロいでしょ?」

「…う、うん」

「だからわたしの話をちゃんと聞いてくれる人ってあんまり居なかったの」

「うん…」

「もちろん葉子ちゃん達は別だよ？」

「うん…」

「男の子とちゃんと話したのも、翔君が初体験で…」

ちょ！？ その言い方は誤解されるから！ でも話の腰を折るのもなんだし…。

「だから…うう」

「菜摘さん…」

「翔君…気持ちが無くてもいいの、ぐすん、い、今だけ抱きしめて！」

「だ、抱きしめ…」

「お願い！」

そんな涙で濡れた顔で見つめられたら、断るわけに行かないよ。

優しく包み込むように小柄な身体を抱きしめてあげると、

子犬のように震えて泣いている菜摘さんが居た。

そこで困った事が発生！ 俺の体の一部に変化が！？

こういう時は、何か違うことを考えればいいんだよな。

えーと…そうだ！ 葉子さんの怒った顔を思い浮かべればいいんだ！

うん、いい感じで般若…もとい葉子さんの憤怒した顔を思い浮かべること成功！

しかし、間近に感じる菜摘さんの香りと感触がそれを上回って効果が持続しません…。

しばらくして菜摘さんは俺から身体を離れた。

「ごめんね…ありがとう」

泣き笑いの表情で言われると、こちらもツラくなってくる。

葉子さんの憤怒の顔も効果が無かった彼も、何とかバレずにすみました。

「何か当たってたけど、気付かなかった事にするね」

バレてました！　ってかそれ言わなくていいよね？

「翔君、帰ろっか？」

「そうですね」

片倉家に帰ると葉子さんが食堂で待っていて、

いつもと違う優しい声で「おかえり」と菜摘さんに言った。

「ただいま…」

あれ？　当然ここは二人でどこ行ってきたか詰問されると思っていたのでちよっとビックリ。

葉子さんは菜摘さんの肩を抱くと一緒に2階に上がっていった。
おそらく前もって葉子さんにこの散歩の意味を伝えていたらしい。

俺はどうしたらいいか分からずに立ちすくんでいた。

「あらあ、どうしたのお？　こんなところで」

「あ、京子さん、実は…」

さっきの散歩のことを京子さんに話す。

「あの…俺どうしたらいいですかね？」

「そうねえ…」

京子さんは右手の人差し指を唇に付けて、少し考えると

「どうもしなくてもいいと思うわ」と言った。

「え…？」

「いつもどおりの翔君でいいと思う」

「そうですかねえ」

「同情で付き合ったとしても、長くは続かないだろうし、菜摘ちゃんを傷付けるだけだわ」

「確かにそっちのほうが酷いですね…」

「若いうちは悩むことも大事だけど、もう夜も遅いしお風呂にでも入って早く寝なさい」

「そうします」

「何なら一緒に入ってあげるわよ？」

って言いながら脱ごうとしなくていいです！

「い、いえ、結構です！」

逃げるように食堂を後にした。

第18話：卒業、そして始まり（前書き）

最初のプロット作成段階から予定に入っていた新キャラ登場です。

第18話：卒業、そして始まり

「翔君！」

「あ、菜摘さん、卒業おめでとうございます！」

遂に菜摘さんの卒業式、胸に着けた花飾りが卒業生の証。

「ありがとう」

「お別れですね」

「ふぐう、えぐう、ひぐう」

「…っ!？」

前触れも無くいきなり何か言いながら泣き出した。っていうか何言ってるか分ないけど。

ひとしきり泣いた後、涙を袖でゴシゴシ拭って、泣き笑いの表情。

「あのね、その第2ボタン欲しいの！」

「え？ このブレザーのボタンでいいんですか？」

「うん！」

ボタンを外して菜摘さんに渡すと、嬉しそうに笑って、また頬を涙が伝った。

「大事にするね」

遠くから菜摘さんと呼ぶ声が聞こえる。

「誰か呼んでますよ」

「あ、孝子たちだ、また後でね」

「はい」

友達のように小走りに転びそうになりながら走っていく菜摘さん。そこ出っ張りとか何も無いから！
つつかコケなくて良かった、せっかく綺麗な制服が台無しになるもんね。

「翔君、私にもボタン頂戴」

振り向くと園田先生だった・・・。

「先生、卒業生じゃないじゃん！」

「卒業生を見送る教師よ、担任じゃないけどね」

何故か無い胸：いや結構ある胸を反らす。

「翔君がギラギラした獣の目で私を見てるわ」

と両手で自分の身体を抱くような仕草をする。

「見てないから！」

ってか胸は見たけど…。

…

「じゃーん！」

と言って、菜摘さんは両手でボタンを掲げる。

「何それ？」

「翔君からもらったボタンです！」

そんな大層なものではないでしょうに。

「菜摘さんって結構古風なんだ」

「えへへ」

「ずるい！ おにいちゃん、わたしにも頂戴！」

「欄ちゃん…これはね、卒業生の特権なんだよ？」

菜摘さんは欄ちゃんに諭すように説明する。

「むう」

拗ねた…、まあ欄ちゃんにもその内、分るだろう。

「じゃあ、乾杯しましょう！」

それぞれがジュースやお酒の入ったグラスや持つ。

もちろんお酒は京子さんと園田先生…って何で先生居んねん!?

「ごそ…ごちよー…」

「…?」

「ごしよーばんに預かろうと思って」

「はあ…まあいいや」

何故か皆がこっちを見ている。

「な、なんですか？」

「乾杯の音頭とりなさいよ」

葉子さんの命令は絶対です。逆らうと大変な目に合います。

「えー…では…菜摘さんご卒業おめでとうございます！ 乾杯！」

「「かんぱーい！」」

皆おめでとうを言いながら、菜摘さんのグラスに自分のグラスを付けていく。

「翔君、はい」

「あ、はい、おめでとうございます」

チンッとグラスが鳴る。

「翔君、あのね、今はね、これからが楽しみなの」

「え？」

「大学に行ったら、また新しい出会いもあるし、翔君よりカッコイイ人が現れるかもしれないし」

「そんな人いっぱいいると思いますよ？」

「翔は相変わらず分ってないな」

横から入って来たのは、明らかにジュースじゃない飲み物を持ったあきらさんだった。

「あきらさんそれ…」

「なんか変な味のするジュースだ」

ジュースじゃないけど、まいつか、良くないけど、たいして入ってないし。

「何が分ってないんですか？」

「翔…お、まえは、格好良いと、お、もう…ぞ」

って酔ってんのかい！

フラフラしてるところを京子さんに、どこかに連れて行かれた。

「だからね、翔君も自分の気持ちを大事にしてね」

菜摘さんはすっきりと晴れ渡ったような笑顔を見せた。

その笑顔を見たとき、肩が軽くなったような気がした。

それから、夜遅くまで、みんなでワイワイ過ごした。

途中、酔ったあきらさんが突然服を脱ぎ出して、みんなで止めたけど…。

…

「うー、葉子？　きのうの記憶がないのだが？　頭も痛いし」

いかにも具合が悪そうに食堂にやってきた、あきらさん。

「あんた何も覚えてないの？」

「…うん」

「あんたきのう洋服全部脱いだのよ？」

「…えっ!？」

うわぁ、この人、何サラツと嘘言ってるんだろ。

「…えっと、そこには、その、翔も居たのか…？」

「居たわよ、隅から隅までじっくり見てたわよ？」

「…なにっ!？」

「ちょ…!？　なに言っ…？」

半眼で睨むのやめてください！

「こうなったからには責任を取ってもらわないと…」

責任ってなんだ!？

「嘘よ、当然脱ぐ前に止めたわよ」

「なんだ、そうか…ほっとしたような、残念なような？」

疑問符いらないから！　そこはほっとしててください！

「そ、それより、菜摘さんは？」

葉子さんに聞いてみる。

「午後に新しいアパートに引っ越すって言ってたわよ？」

「そうなんですか？ 手伝ったほうがいいかな？」

「業者に頼んだらしいから、別にいいんじゃない？」

「そうですか…」

「手伝うフリして下着とか色々見ようと思ったんじゃないの？」

「違うから！」

…

「キャア」

家に居ても暇なので、駅前まで行こうと片倉家の玄関を開けた時、誰かがドアの前に居たらしい。

見ると尻餅をついた可愛い感じの女の子が居た…っていうかパンツ見えてますよ！

「あ、ごめん！」

急いで腕を掴んでおこしてあげる。

「ありがとうございます」

「いやこちらこそごめんね、誰かいるなんて思って無かったから」

「…」

俺の顔をじっと見つめて固まってる。

「あの…?」

「かっこいい…」

「あ、あの、もしもし?」

「ひゃわ! ごごごめんなさい!」

ひゃわって…。

「それで、この家に用事?」

「はい、大家さん居ますか?」

「大家さんっていうか家主ね」

「あ、はい」

「とりあえず入ろうか」

「はい」

しかし…可愛い娘だな。

「ここに居てくれる? 今呼んで来るから」

「はい、ありがとうございます」

「あれ？ 翔君出掛けたんじゃなかったの？」

「そうなんだけど、この娘が京子さんに用があるっていうからさ」

「ふーん…」

葉子さんは値踏みするように、その娘を観察している。

うん、そんなにじろじろ見たら失礼だから！

「京子さーん」

京子さんたちの部屋の前で声をかける。そういえば京子さん達の部屋入ったことないな。

「はあい？」

少しすると京子さんが部屋から出てきた。

「どうしたの？ 私と良いことしたいの？」

「違うから！」

「あら、残念、それで何か用？」

全然残念がってないじゃん！

「お客さんですよ」

「あら、どなたかしら？」

「女の子ですよ、食堂に待たせてます」

京子さんと食堂に行くと、葉子さん、あきらさん、蘭ちゃんに
じろじろ観察されているさっきの女の子がいた。

「あ！ 大家さん」

やっと助けが来たと思ったのか、ほっとした表情を見せる。

「あら、楓ちゃんじゃない、どうしたの？ 来るのは明後日からじやなかったかしら？」

「あ、はい、そうなんですけど、どんなところか見たくて」

「そう、ちょうどいいから紹介するわね、明後日からここで暮らす
二宮楓ちゃんよ」

「そうなんだ」

「あら翔君嬉しそうね」

葉子さんがジト目で睨みながら、嫌味っぽく言う。

「そりゃ、女の子が増えりゃ嬉しいですよ」

「可愛い女の子が増えりゃだろ？」

火の油を注ぐな！　って視線をあきらさんに送ったけど、そっぽ向かれた…。

「それって自分で自分を可愛いつて認める発言よね」

「うぐっ！　確かにそうだ」

いらんこと言うから墓穴掘るんだよ。

なんて思ったら思いっきり睨まりました。心読むな！

「に、にの、二宮楓ともうす、申します、し、4月から川上高校です、

じゃにゃい、か、川上高校1年生です、よ、よろしくお願いします」

うん、緊張しすぎでだから！　途中変になってるし！

「よろしくね」「よろしくな」「おねえちゃんよろしくー」

三者三様に挨拶をする、最後は俺の番。

「楓ちゃんよろしく」

そつと手を差し出すと、何の躊躇もなく優しく握り返してきた。

「変態…」

「ちょ…あきらさん、違うから！」

さっきの仕返しとか？　っていうか完全に逆恨みだけどね！

「大家さん、皆さん、よろしく願います」

「それから私のことは大家さんじゃなくて、京子さんか、京子さまか、お姉様って呼んでね」

何その3択…。

「はい！ お姉様！」

何故、それをチョイスする！？

第18話：卒業、そして始まり（後書き）

百合な展開にはなりません。m () m

第19話..旅立ち

遂に菜摘さんが片倉家を去る時がきた。

荷物は全て引越し業者の手でトラックに積み込まれている。

最後の挨拶のため、みんな玄関に集まった。

「京子さん、お世話になりましたあ」

「菜摘ちゃん、いつでも遊びにおいでね」

「はい、ありがとうございます」

京子さんはいつもと変わらないな。

まあしんみりされても困るけどさ。

「蘭ちゃんもありがとう、妹が出来たみたいで楽しかったよ」

「えー！ わたしは菜摘ちゃんが妹のような気がしてたのにー」

「ふえ！？」

「ぷふっ…」

我慢できなくて笑っちゃった。

「ヒドイ！ 翔君いま笑った！」

「いえ、笑ったのは葉子さんです」

「んなっ!?! 翔君? あとでちよっとお話しましょうね」

うう、冗談なのに…。

「菜摘ちゃん…うぐっ…また一緒に…ぐすんっ…一緒にお買い物行こうね?」

「うん、蘭ちゃんまた連れてってね!」

やっぱり蘭ちゃんは堪えられなかったか…、
っていうか18歳が11歳に対して連れてってって言うのもアレだ
が。

「葉子ちゃん、諦めずに頑張ってね!」

「な、何を諦めずに頑張るのよ!」

「そんなの決ってるだろ?」

あきらさんは口角を少し上げて笑う。

葉子さんがあきらさんを睨むが、あきらさんは知らん顔。

「あんたもでしょ、あきら」

「んな!?! わ、私は別に頑張ることなんてないのだが…」

最後はごによごによ何を言ってるのか分らなかったが、
いったい何に対して頑張れと言っているのだろうか?

「菜摘さん、迷子になっても連絡してこないでね?」

「そんなあ、葉子ちゃん冷たい事言わないでよお」

菜摘さん迷子になると葉子さんに助け求めてたのか…知らなかった。
つか迷子って…。

葉子さんは柔らかい笑顔を菜摘さんに向けている。

なんだかんだ言って葉子さんも菜摘さんが好きなんだな。

葉子さんのあんな裏の無い笑顔初めて見たかも。

って葉子さんに睨まれた！ 心読まれた！？

「あきらちゃん、自分の気持ちには素直になってね」

「わ、私は自分の気持ちを誤魔化しているつもりはないが…」

「頑張って！」

「だ、だから頑張ることなんてない…」

今日のあきらさんはしどろもどろで面白い！

ってあきらさんに睨まれた！ またしても心読まれた！？

「翔君ありがとう、翔君がいたから思い出が沢山できたよ」

泣きそうな菜摘さんの顔を見ると、チクリと少し胸が痛んだ。

「俺なんかが居なくても、思い出は沢山できたと思いますよ？」

「「「はあ…」」」

「な、なんでみんな一斉にため息つくんですか、俺なんか変な事言
ったかな…?」

「ま、まあ、それでこそ翔君というところかな」

「そうね」「そうだな」「そうだね」

なんか腑に落ちないが、今はいいか。

「俺も菜摘さんを弄れて楽しかったですよ」

「えろ…」

何をあきらさんは真顔で言ってた!?

「じゃあ、あきらさんにはそっち方面で弄らせて貰おうかな?」

「んな!?!」

あきらさんは見る見るうちに顔が真っ赤になる。

「つていうのは嘘ですけどね!」

「…っ!?! 翔…あとでちょっと話しようか?」

「…ごめんなさい」

そんな俺たちを菜摘さんは少し寂しそうに眺めている。

「な、菜摘さん、またみんなで海とか行きましようね！」

「翔は水着が見たいんだろ？」

「ち、違いますよ」

「そんなの言ってくればいつでも見せるのに」

「え？」

「ううん、じゃあ：そろそろ行くね」

菜摘さんは1歩後ろに下がりドアの前に立つ。

「お世話になりましたあ」

菜摘さんはペコリとお辞儀をしてドアを開けると、穏やかな太陽の光が菜摘さんを包み込み、

シルエットだけを俺たちに見せる。

まるで菜摘さんに羽が生えて、新しい場所に飛び立つような錯覚に陥る。

「元気で」「いつでも遊び来てね」「何かあったら連絡しなさいよ」

菜摘さんの顔は涙でいっぱいになり言葉が出せないでいる。

蘭ちゃんが近寄りそんな菜摘さんの涙をハンカチで拭っている。

やはり蘭ちゃんのほうがお姉さんみたいに見えるな。

蘭ちゃんからハンカチを受取りトラックに乗り込む菜摘さん。

ウィンドウを下げて、みんなに手を振りながら「またね!」と言った。

「うんそうだね! またね!」

永遠の別れじゃないから、この言葉で充分でしょ?

「またね!」

第19話：旅立ち（後書き）

菜摘は今後たまに出てくる予定になっています。

第20話：天然

「改めまして、お姉様、皆さん、今日から末永くよろしく願いしま：いたっ！」

ペコリと可愛らしくお辞儀して、最後はテーブルに頭ぶつけてるし。

「よろしくーって、末永く!？」

「翔君、この娘天然かも」

葉子さん、本人を前にしてその発言は…。

「て、天然じゃないですよー」

おでこをさすりながら反論する楓ちゃん。

「人には良く天然だね、って言われるんですけど、天然じゃないです」

うん、天然の人は自分のこと天然って言わないからね！

：

「翔さんせんぱい？」

うん、それ変だよね？　さん付いてるのに先輩ってさ。

「ん？　ああ、楓ちゃんどうしたの？」

ひょこつと楓ちゃんがドアのところに顔出した。

「ちょっと部屋の整理手伝ってもらいたいんですけど？」

「うん、いいよ」

即答して楓ちゃんの部屋に行くと、すでに女の子らしい部屋が作られていた。

「このダンスなんですけど、もう少しこっちにズラしたくて」

「うん？　ああ、それぐらいなら動かせそうだ」

「すみません」

「持つとこないからここの引き出し開けるね」

返事を貰う前に開けたのがいけなかった、そこには色とりどりの下着が…。

「ひゃわわ！」

慌てて引き出しを閉める楓ちゃん。

「ゴメン！　そこが1番持ちやすかったから…」

「は、はい…」

楓ちゃんは頬を染めて恥ずかしそうに俯いている。

「そうだね、やっぱり恥ずかしいよね…」

別の引き出しを開けてやってみるも、上手く力が出せない。

「翔さんせんぱい、恥ずかしいけど開けていいですよ」

「え？　そう？　な、なるべく見ないようにするよ」

「翔さんせんぱいになら見られてもいいっていうか、むしろ見て欲しいかな…なんて」

楓ちゃんは1人で何やらごによごに言っどこかに旅立っている
ので、
先にダンス動かしちゃうおう。

「楓ちゃん？」

「…」

まだどこかに旅立ってますね。

「おーい、楓」

と呼び捨てにして頭をガシガシと撫でてみる。

「ひゃわわ！ ご、ごめんなさい！」

思ったとおりの反応が帰ってきてホッとする。

「ダンス、この辺でいい？」

楓ちゃんは10cmほどズラしたダンスを確認して

「はい！ ありがとうございます！」

と元気に返事をした。

「じゃあ、部屋戻るね」

「あ、ああのあの」

何故かおどおどと呼び止める楓ちゃん。

「うん？」

「も、もう1度、あ、頭を撫ぜてもらえませんか？」

「ああ、そんなこと…」

って頭撫ぜたの分かってたんかい！

「…」

楓ちゃんは少し顎を下げて、頭をこちらに向けて目をつぶっている。
これで顎が上がってたら、キス前のような感じじゃね？

「じ、じゃあ、撫ぜるよ？」

なんか意識すると緊張する。

「…は、はい」

その緊張が楓ちゃんにも移ったみたいだ。

そっと手を伸ばし頭に触れようとした時、突き刺さるような視線を感じた。

「翔君…何してるのかなー？」

「…っ!？　な、なにもシテナイデスヨ、ヨウコサン、h a h a h a
」a

「翔、そういうことは鍵閉めてやらないと」

「あきらさんに色々するときにはそうします」

「い、いい色々ってなんだ!？」

あきらさんの顔は見る見る真っ赤に染まっていく。

「あきら動揺しすぎ…っていうか何を想像して赤くなってるのよ」

「んな!？　何も、そ、想像などしていない!」

「どうだか」

「せ、先輩方、私が翔さんせんぱいに頼んだんです」

あきらさんが反論しようとしたとき楓ちゃんが割って入ってきた。

「…何をよ？」

「タ、ダンスをズラしてくださいって…」

思わずズッコケそうになったよ。今の争点はそこじゃないから！

「あんたねえ」

楓ちゃんの肩がビクツツと動く。

「か、可愛い後輩をあんたと呼ぶのはどうかと…」

「ずいぶん肩持つのね、それに＜可愛い＞後輩ねえ」

「そ、そこに他意はないです」

「ふーん…」

ジト目で睨む葉子さんから冷氣でも出ているかのように、部屋の中がひんやりとしてきた。

ドアの前には葉子さんと、少し涙目で葉子さんを睨むあきらさんがいる。

ここを突破する道があるのか？　そこで俺の頭に閃くものがあつた。

「な、なによ！」

自分の前に移動した俺をみて、言葉とは裏腹に目が泳ぐ葉子さん。

そつと頭を撫ぜ撫ぜしてみる。

「…っ!？」

驚きの表情で俺を見たけど、構わずに頭を撫ぜる。

そのうちうつとりとした表情で、気持ちよさそうに目を瞑りだした。まるで猫が頭を撫ぜられて、気持ちよさそうにしているように。

その隙を突いて脱出に成功！ そのまま脱兎の如く自分の部屋に向かって逃げる。

「あ！　こら！　もう少しだったのに…」

後ろで葉子さんが叫んでいたが、何がもう少しなのか怖くて聞けなかった。

当然その後すぐに捕まって、葉子さんとあきらさんからも肅清されたけど。

第21話..後輩と初登校

今日は楓ちゃんと始めての登校です。

「なんか緊張しますよー」

「え？ 何が？」

入学式は昨日だったし、なんかイベントあったか？

「翔さんせんぱいと登校なので、緊張します」

「そ、そう？」

楓ちゃんは頬を染めた顔でこちらを見上げてニッコリ笑う。
か、可愛い…。

っていうかコレはまさか、好意を持ってもらってるってこと？
いやでも出会ってからそんなに経ってないし、それはないか。

なんて思いながらニッコリ笑い、見詰め合うこと体感で5秒くらい。

「っていうかさー、翔君、私たちもいるんだけど？」

葉子さんがジト目で睨んでました。

「え？ あ、あはは、分ってますよ」

「どうだか…」

と言って肩をすくめる葉子さん。

右側に葉子さん、左側に楓ちゃん、そして何故か後ろにあきらさんという、

強力な布陣で登校しております。

周りの視線が、特に男の視線が痛いから、もう少し離れて欲しいと思うのは、

贅沢な悩みなんだろうなきつと…。

「翔さんせんぱい？」

楓ちゃんは俺の袖をちょこんとつまんで、クイクイッと下に引っ張る。

「ん？ なに？」

その仕草が可愛くて、思わず顔がニヤけそうになったところをあきらさんに見られた。

「キモ…」

ボソッと呟いたの聞こえますよっていう感じで、チラッとあきらさんを見ると、

そっぽ向いて口笛吹いてるし、いやバレバレだから！

「翔さんせんぱいの、好みのタイプってどんな人ですか？」

その問いかけに、右隣と後ろから興味津々の空気が流れてくる。

「んー、そうだな、俺に対してツンツンしない人でー」

「へえー」

葉子さんの低い声の合いの手が、何かこええ。

「それから、意地悪を言わない人かなー」

「ほほう」

あきらさんのドスの利いた合いの手が、何かこええ。

「他には？」

楓ちゃんがきよんとした顔で、催促してくる。

そりゃそうだ、今のは葉子さんとあきらさんに対する嫌味だからね。っていうか、あの嫌味に反応するってことは自覚はあるんだ。

「ショートカットが良いとか、そういうこだわりは無いなー好きになった人がタイプ…かな」

「なるほど、年上が好きとかは」

「うん、それもあんまこだわりは無いけど、離れすぎても嫌だな」
少し表情を曇らせる楓ちゃんは、切羽つまったように聞いてくる。

「あ、ああのあの、2つ年下はダメですか…？」

「2つくらいなら許容範囲だよ」

「良かった…」

「え？」

何やらつぶやいたが俺には聞こえなかった。

「何でも無いです」

そう言って楓ちゃんにはぱあっと笑った。

「それにしても2つ年下って、やけに具体的だけどなんだろう？」

「「はあ…」」

葉子さんとあきらさんが綺麗にため息でハモってどうしたんだろう？

「え…？ 葉子先輩今のって？」

「ああ、翔君ってバカだから、頭で考えた事を口に出して言っちゃ
うのよ」

「そうそう、俺バカだから、って誰がバカだ！？」

「それに、ちょっとアレだから鈍感なんだよな」

「あきらさん、ちょっとアレって何！？ それに鈍感って何が！？」

そうかさっきの仕返しだな！

「まあ、これが翔君よ」

「まあ、これが翔だ」

「了解です！」

楓ちゃんは何故か葉子さんとあきらさんに敬礼してるし、何なの一体。

学校の近くまで来ると健太郎を発見した。

「おーい、健…」

呼んでる最中にこちらに気付いた健太郎は、すごい勢いで走って行ってしまった。

「なんでやねん！」

：

「おい、健太郎、さっきは何で逃げたんだ？」

教室に入ってすぐに健太郎を捕まえた。

「え？ 絡まれてるのかと思って」

「絡ま…はあ」

そりゃ、遠めに見たら囲まれているように見えるけどさー、性別くらい分るよな。

「女子3人に絡まれるって、どんだけ弱い設定されてんだよ!」

「でも、女子に強気に出てる翔を見たこと無いしさ」

「うぐっ…そ、それは、ほら俺の周りって怖い女子多いからさ」

すると健太郎は怯えた表情で、何も言わずに自分の席に戻っていった。

「…?」

「翔君? その怖い女子って誰の事かなー?」

妙に優しい葉子さんの声が逆に怖いのですが。

「そ、それは、えーと…そ、園田先生」

「翔、苦しいな今のは」

あきらさんも顔は笑ってるのに、目が笑ってない!

「はい、みんな席着いてー」

そこで園田先生が教室に来たので、それ以上追求されずに済んだ。

「翔君、後でお話しましょうね」

葉子さんはボソつと言ったけど、俺には耳元で叫ばれたように聞こえました。

「HRの前に、翔君、減点1ね」

「なにが!？」

「なにが…?」

「いえ、なんでもないです」

やっぱり俺の周りって怖い女子しかいないじゃないか!？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481g/>

片倉 荘

2011年7月19日19時21分発行